

いつも通り？の放課後に



告白するか迷っている。相手は…成田^{なりたさえ}。彼女は完璧だ。何が完璧かって、それは普通ってトコだ。どれ位普通かと言うと、例えば…そう、高校入学以来同じクラスだって事に俺が気付いたのは、今年の春だった。それも担任に『お前達また同じクラスか。丁度いい。日直のトップバッターをやれ。』と言われて。成田に面と向かったのは、それが初めてだった。よく見ると、顔は…結構な美人。でもあの一昔前の眼鏡と三つ編みのせいかな、特別かわいいとは思われていない。目立つこともせず、孤立しているわけでもない。成績も多分、中の上。俺と同じだ。普通。そこがいい。俺と丁度いいと思う。それで好きになった。俺と同じで普通だから。俺にとっての完璧だ。思えば、俺はそれまで、学校も教室もただ漠然と眺めているだけで、何かを気にすることなんてなかった。そんな俺が学校を出ても、成田の事を気にするようになった。今だって、教科書を読む成田を…

「じゃあ、続き、村井^{むらい}読んでくれ。」

「えっ、あ、はい…。カッコッ、コノジケンニオケ、ル、…。」

…急に指すなよ！囁んじやったじゃないか！普通に読めないんだよ緊張するとっ。先生も二年間同じ受け持ちなんだからそろそろ気付いてくれよ！

「…。いや、村井、もういいぞ。じゃあ次は…」

一瞬、教室に気まずい空気が流れた。俺はただ普通にしていただけなのに、これじゃあ…。俺は緊張すると囁む。それは普通にありえる話だが、度合いが普通の囁み具合じゃない。ひどい時は、言い間違えたりする。『成長ホルモン』を『成長フェロモン』と言ってしまった時は、暫くの間『フェロモニスト』とかいうわけの分からない渾名を付けられた。それに比べれば今回はまだマシだけど、彼女は…成田は笑ってるかな？…笑ってない。それ以前に興味なしってとこか？…ん？目が合ってる気がする。

「○○○○○○」

声は聞えない。口だけが動いた。なんだろう。

『ダイジョウブ』

ああ、大丈夫、か。って、俺に言ってくれてるのか？これは、なんだかいい感じじゃないのか？『告白』の二文字が頭を侵食する。本当に言わなくていいのか？でもどこまでも普通な俺が告白なんて…。

「呀！今日の部活なんだけど…。」

気が付くと、授業は終わっていて、成田は他のクラスの女の子に呼ばれて出て行った。あの人は確か、成田と同じ演劇部の有名な美人だ。

告白するか迷いながら登校し、授業中成田をチラ見して、また告白するか迷いながら下校する。そんな毎日が繰り返されていた。俺は学校と名前をつくものに入った時点で俺は普通以上になるのは諦めた。所詮凡人は凡人。広い世界で特別な人間になれる奴は、生まれたときから決まってる。凡人が目立とうとして失敗した例がどれだけあることか。俺はそんな危ない事はしない。平穩に事を過ごしていだけだ。だけど、コクる位は普通だよな？ゲームもアニメも普通に好きで今まで彼女なんて居なかったけど、別にそっちにどっぷりってわけでもないし、勿論現実の女に興味がないなんてことは全くない。ずっと普通だった高校生活も、もう半分を過ぎている。来年の夏は受験でそれどころじゃないだろうし…。ちょっと変化があってもいいんじゃないか？普通過ぎるのは、逆に普通じゃないんじゃないか…

「…なあ？」

「…ってお前、毎日帰宅後即効で人の家にゲームをしに来た人間の、言う台詞とは思えんが。」

「やっぱコクった方がいいよな？夏休みも、もうすぐだし。」

「良^{りょうじ}二、俺はゲーム以外でそんなに熱く語るお前を見たことがない。…という点を考慮すれば、告白してあっさりフラれるのが最善策だと、俺は思うが？」

コノ男は長^{はせがわ}谷^{ふうま}川風馬。俺はハセと呼んでいる。コイツともなんだかんだで高一以来の付き合いだ。

「フラれるかどうかはわからないだろ？」

「成田^{なりた}は意外と格付け高いぞ？どうせ知らんだろうから教えてやろう。」

偉そうな上に、やたらと回りくどい喋り方をする厭味な奴だが、頭は切れるし顔自体はカッコいいし、学校の誰も知らないけど両親とも著名な弁護士らしい。家もでかい。庭なんかちょっとした公園くらいあって、池には鯉が泳いでいる。ここまでは俺と共通点ナン。でも伸ばしっぱなしの長い前髪と、愛想の無い眼鏡で、ハセの素顔を知る奴は少ない。そういう、外見を気にも留めない、目立とうとしないところが、俺がハセと続いている理由の一つ。

「高校二年の夏休み目前となればな、お前だけでなく、人は人で躍起になるものだ。」

「だから何だよ？」

「だから、あの今時珍しい眼鏡の下の美人に気付いてるのは、何もお前だけではないということだ。まあ、マイノリティではあるがな。」

「え、じゃあもう…」

「いや、男はいない。が…」

「…が？」

「表立っての動きはないだけで、狙っている輩は多いという事だ。」

「知らなかった…」

「やはりな。なぜ、表立った動きがないのかは、お前が一番分かっているだろう。」

「俺が…？」

思い当たる事がない。目を宙に浮かせた瞬間に、ハセがため息をついた。

「狙っている輩の殆どが、お前の様に『普通』で勢いのない者だからだ。」

「それ、どういう意味だよ？」

「成田は女としての隙がない為、勢いの無い奴には超えられない壁がある。逆に勢いのある若者は、成田の様に隙のない女には興味がない。」

「ハセ、お前、彼女いたこと無いくせに、よく隙だのなんだの言えるな。」

「情報の一つだ。経験などというものは、所詮主観的な結論にしか結びつかん。この世に性差がある限り、知っておいて損のない情報として仕入れた。」

「つつ一か、どうやって掴んだんだよ、そんな情報。」

「お前、二年近くの付き合いでも、まだピンと来ていない様だから言うが、俺は天才だ。ハッキングなどゲームより劣る。」

そうだった。ハセは『情報』と名の付くモノにやたらと強い。某ネットゲームの四天王の座を勝ち取ったのは小二の頃だったらしい。

「プログだのなんだの、俺に言わせれば脳みそ丸出して歩いてるようなものだ。」

「お見逸れしました…。っじゃあ、成田の事も…」

「ううん…。周りの男共に比べて、成田の情報は極限に少ない、と言うか…。まあ、男共の意見を統合・平均化すると、成田は『最初の一手さえ出せれば、すぐ手に入る女』として認識しているようだ。第三者として察するに、早い者勝ちということぐらいか。」

「早いものって、なんだそれ！そんな変な奴らに成田の良さが分かる訳がない。」

「良さ、か…。そう言うお前は、面と向かって喋った事があるのか？」

「二、三回日直で…。」

ハセは微妙な顔つきで俺を見ていたが、火の点いた俺は止まらない。

「俺今から学校行ってみるわ。成田、結構遅くまで部活行ってるみたいだから、会えるかも。」

「…。精々、緊張しない様にな…。」

俺にだって、これくらいの勢いはあるんだ。ハセの家を飛び出して学校を目指す。寝坊した時でさえ、通学路をこんなに走った事はない。やっぱり俺は成田の事が好きなんだ。じゃなきゃ今、こうまでして、彼女に会いに行こうとするわけない。息が切れる。それでも、もうここまで来たからには…

「はあ…」

着いたけど、どこ探せばいいんだ？成田の入ってる演劇部の部室は、確か三階…。階段を上がると、すぐ隣が部室だった。勢い任せでドアを開ける。

“ガラガラッ…”

「成田！…」

中には誰も居なかった。…考えてみれば、当たり前か。別に待ち合わせしてたわけじゃないんだから…。なんだか急に我に返ってしまった。俺、何やってんだ？成田が居たとしても、何て言うつもりだったんだ？『一目惚れしました』？二年も同じクラスで今更って感じか？でも本当のことだし…『好きです』？なんか短すぎる。『付き合ってください』？…俺、付き合っただろうつもりなんだ？デートか？デートってなにすんだ？手繋いで…いやいや、そうじゃなくって、どうやって告白するのだろ、今考えてるのは。やっぱ『一目惚れ…

「あれ…村井君？」

振り向いて体が固まった。

「な、成田さ」

「何してるの？」

「い、いや、えっと」

やばい！緊張して…。なんて言うんだっけ？ああ、そうだった…

「オ、オレ、…ヒトコロシマシタ…！」

…ん？

「…人…殺し…？」

うおお！しまったああ！また囁んだあ！違う…

「い、いや、そうじゃ…」

「し！黙って！…大丈夫。誰も聞いてない。」

「え？…」

「裏門から出よう。早く！」

彼女が俺の手を握った。手を繋いでいる。余計言葉が出ない。俺の手を引いて走ってるのは、本当に成田なのか？夢みたいだ。成田結構足速いんだな。体育ではそんなトコみてなかった。それにしてもこの手、ちっちゃいなあ。でも俺の手しっかり握って離さない。かわいい。

「とりあえず私ン家に来て。それから話そ。」

なっ、成田の家っ？なんか話が高速で進んでる気がするけど、いいのか？でもとりあえず成田に近づけたのはいい兆候だ。…多分…。

成田の家は、およそ俺とは縁の無いような盛り場の近くだった。俺は私服だからまだまじだが、制服のままの成田が通るには似つかわしくない雰囲気だ。事務所のようなビルの裏から階段を上がると、成田という表札が見えた。ドアを開けると、そこは事務所を無理矢理生活空間に変えている様な部屋だった。当たり前だが、俺の家とは全然違う。そんなどうでもいい事を考えていると、突然パツと手が離れた。

「私、着替えて来るから、適当にくつろいでて。そこ、テレビでこれリモコン。」

くつろいでって、言われても…成田が奥の部屋に消える。さっきまで繋いでいた左手が妙に寂しく感じた。どんな服で出てくるんだろう？気になる。白いワンピースとか、いいかも。しかも、眼鏡を外してて、髪もほどいてたり…。等と俺の妄想は膨らむ一方だ。それにしても、いきなり俺を家に連れてくるなんて、成田は何を考えてるんだろう？人殺しを真に受ける？…わけないよな。だったら普通こんなことしないよな。叫んで警察とかだよ。まあ、百歩譲ってそうだったとしても、後で話せばいいだろう。折角家に連れて…。ってことはもしかして…。よし、実は成田も俺が好きだったと仮定してみよう。状況的に俺が告白しようとしてたのは…分かるだろう、きっと。でも俺が囁んじやってバツの悪い空気が出てた。そんな俺を可哀想に思った、と。うん、いい感じだ。それで落ち着いて話せるように家まで連れて来てくれた…。この時間だし、折角だから二人で飯でも食って、ちょっと喋ったりして…いい感じに…。ん？おい、親がいたらまずいだろう？

「成田さん！今日ご家族は…」

「居ないよー。そもそも家族、お父だけだしあんまり帰って来ないし。どうかした？」

「なんだ…いやなんでもない。」

すげえラッキーだ。やっぱ成田も俺の事…これはいよいよ…いや別にどうこうしようってわけじゃないんだ…け、ど…。それより、今度こそバシツと言うぞ。「好きです」でいい。これなら囁み様もないし…。

「いやいや、待たせたね。」

「っ！」

おおい！なんだ、その格好は！目の前に現れた成田は、全然いつもと違った。全然だ。ちょっと待て。これは本当に成田なのか？

「どうしたの？具合悪い？」

眼鏡無しは想定内、髪下ろしてるのもいいとして、あの、上に着てる派手な黄緑色の服は、何て言うのか知らないけど、物凄く布の面積少ないよな？背中が殆ど見えてるし…ブラジャーどうなってるんだ？…いやいや、スカート短いだろ！あれじゃあ足が全部…ああ、足きれいなんだ…。違う！戻って来い！俺！俺は普通の成田が好きなんだろ？目立たない普通の。あの成田はどこ行ったんだよ…俺は、普通の、成田が…

「まあ、無理もないよね。人殺したんだし。」

…好き…

「はい？」

「誰、やっちゃったの？」

「な、何を…」

「言いたくない、か。それも仕方ないよね。いやあ、村井君、いつか何かやるとは思ってたんだよねえ。最近の事件の大半、
いわゆる所謂『凡人』が犯人じゃん？」

「いや、俺は…」

「大丈夫、わかっている。自首するか迷ってあんなところでポーっとしてたんでしょ？でも良かったよ。通りかかったのが私で。」

「ちょっと待っ…」

「何を隠そう、ウチの家業は代々探偵系何でも屋！浮気調査から夜逃げ、果ては別れ工作までこなすのだ！」

「だ！…って…」

「万一逃げ切れなくても、とある伝手から某有名弁護士を斡旋してあげる！」

「ちょっと待った！だから、俺は何もしてないから！ホントに！」

「そう！その意気だー！白を切り通せば勝ったも同然！」

「何言ってるんだよ！俺はホントに…」

「まあまあ、落ち着いて。お父と連絡つくまでは私がきっちり面倒見るから。それにしても本当に良かった、私で。私こういうのずっと待ってたんだ。夢みたーい。さあてと、着替えもしたし、とりあえず…RPG好き？」

「は？」

「ロールプレイングゲームは好きですか？」

「好き、けど…」

「よし！じゃありアルRPGに出発～！」

「えっ、ちょっと…」

…ダメだ…。全然聞いてない。

「ご飯どうしようねえ？あんまりお金ないし…あつ、あそこにあった店まだあるかな…」

というより聞く気が無い。こんな筈じゃなかったのに…。俺はまたも成田に手を引かれて連れ出された。俺、一体どうすりゃいいんだよ？

「…というわけなんだよ…」

「ギャツハツハ…」

こんなに笑うハセは珍しい。全くもう。人事だと思って…

「笑ってないでなんとか言えよ！」

「ハツハ…ひい、すまん、すまん。で、今どこだ？」

「飲み屋街のどっかの公衆トイレ…」

「…に、隠れて電話しているのか。」

「ハセ～。俺ホントどうしたらいいんだよ…」

「どうしたっても、こうしたっても、お前成田が好きなんだろう？ならばこの機会を生かせ。」

「だから、俺は普通の成田が好きなんだって！」

「嫌なら帰れ。」

「それは確かにそうなんだけど…。でもこんな危なそうな飲み屋街に置いていくわけにいかないし、なんか成田楽しそうだし…」

「…。あのな、良二。大体お前、普通普通と言うが普通とは何だ？基準は？」

「それは…目立たなくて…俺みたいな…」

「言っておくが、成田冴の顔立ちは元々目立たなくないし、本当に普通がいいのなら、他にも大勢いるだろう。自覚がないようだが、お前は面食いだ。その上、今時高二で女っ気もなく、ほぼ毎日、俺と二人でゲームだのやっているのも『普通』ではないぞ？」

「うっ…。」

「色々な意味で良い機会だと思うぞ？人間誰しも裏がある。しかし裏なんぞ、そうそう他人に見せるものではない。それも受け入れるかどうか、分かれ目だと思うぞ？見極めろ。」

「…なんだよ、偉そうに。」

「それより、長電話してていいのか？危なそうなところなんだろう？放つといていいのか？」

「あ…。」

「お前の家には俺から連絡しておいてやろう。どうしても行き詰ったら、またメールでもしろ。じゃあな。…ピツ、ツーツ…、一方的に切られた電話を仕舞い、慌てて外に出ると成田の姿が見えない。

「あれ？成…」

いた！向こうの方でなんかおっさんと喋ってるぞ？おっさんが金を成田に押し付けて、肩に手を…これは…完璧に絡まれてる！やばい、なんとかしないと…。

「あっちにイイところが…」

おっさんが俺に背を向ける寸前に、やっと声が出た。

「成田！」

「なんだあ、このガキ。」

酒臭い息がかかる。どうしよう…

「なっ、成田に触…」

「必殺…かこうせんふうきやく下降 旋風脚！」

視界から一瞬にして成田とおっさんが消えた。…と思ったら、おっさんはグツタリして地面に転がっていた。成田は片足を伸ばした状態でしゃがんでいる。

「な、成…田？」

「ふう。説明しよう。下降旋風脚とは大抵の相手を一撃で倒す必殺技…俗に言う足払いである。」

足払い！？成田、お前一体何者だ！？

「…う、イタタ…」

やばい！俺の心の突っ込みをよそに、おっさんが起きようとしている！

「成田！逃げるぞ！」

「え～、勝てるのに…」

唇を尖らせて残念そうな顔で俺を見る。

「いいから走れ！」

今度は俺が成田の手を引いて走り出した。暫く走った後、成田がついてこられてるか、心配になって横目で確認すると目が合った。

「大丈夫か？」

「うんっ。」

ええ！？息切れどころか、なんだか楽しそうなんですけど！？

「サエはオッサンを倒した。サエは3万エンを手に入れた。」

「なんだって！？」

あまりの事に足が止まった…。

「じゃーん。」

目の前で万札が三枚揺れている。

「これで食料を補給しよー！」

「何やってんだよ！」

「リアルRPG。」

「リアルだったら、ただの追い剥ぎだろ！」

「おお！ナイス突っ込み！」

「まかせとけ！…ってそうじゃなくて…」

「くっ…」

急に成田が屈み込んだ。

「どっか痛いのか…？」

「…く〜っ、くわあッハッハハッ…」

「笑うんかい！」

「ハッハ…、ごめ…、ブツ…だって、その顔！」

「何だよ…」

「…と、言い方！初めて見た！」

「失礼だな！俺だって成田の大笑い初めて見たよ。」

「変？」

「っていかめちやくちゃ楽しそう。いや、やっぱ変…」

「…。…ブツ…ダメ、止まんない…笑っていい？」

「もう笑ってるじゃん…。」

「あ、そうか…」

「それにしても、リアルRPGって…」

成田の『下降旋風脚（足払い）』を思い出した途端、今度は俺が噴出した。暫く二人して笑った。笑ってる内に細かい事はなんだかどうでもよくなってきた。

「あんな技、どこで覚えたんだよ？」

「実践的な格闘技はお父にしこまれた。後、格ゲーからパクったり。」

「あ、それはネーミングで分かった。なんとなく。」

「著作権に引っかかるかな？…ところでこれからどうする？RPGといえば…」

「続くの！？」

「修行！よし、カネ仙人のところに行こう！」

「か、カネ…？」

なんなんだ！そのどこかで聞いたようなフレーズの人物は？

「ほら、固まってないで、こっち！」

歓楽街の外れから、バスに乗る事十五分。着いたところは人気の無い山の麓だった。まさか山の奥にテントでも張って住んでるんじゃないか…

「着いた～。ここ！」

…良かった、割と普通の家だ。…けど、『空手道場』って書いてあるぞ！？

「ちょっと、成田、まさか本当に…」

…ピンポーン、

成田が至って普通にインターホンを鳴らす。

「何用か？」

引き戸の奥からドスの効いた声が響いた。

「おい、成…」

「道場破りデース！」

何！？引き戸が勢い良く開く。俺は、もうダメかも知れない…。父さん、母さん、先立つ…

「おお！冴坊かぁ！良く来たのう。」

野太い声とは裏腹に、くしゃっとした笑顔の老人が出てきた。

「うん。修行に来た！これ同級生の村井君。」

「こ、んばんわ…」

突然紹介されて声が裏返った俺を、老人は訝しげに見て言った。

「なんじゃい。弱そうな奴じゃのう。」

「これがカネ仙人。^{なりたかねひさ}成田金久。私のお爺。」

「よろしくな。まあ二人とも上がれ。」

「その前に私、買出し行ってくる。お爺ン家なんもないでしょ？なんか入るもんある？」

「じゃあ、ツマミを頼もうかの。銭はあるんか？」

「うん。大丈夫。さっき稼いだ。」

「相変わらず遅いのう。」

「えへへ～。じゃ、私帰るまでに村井君鍛えといて！よろしくねー。」

行っちゃたよ！鍛えるって、よろしくって…。振り向くと、カネ仙人の目がキラッと光った。

「ほれ、早よ上がらんかい。しっかり鍛えてやるぞ。」

まじかよおおお！

「喝ッ！そんなことでワシに勝てると思うのか！？」

「す、すみません！」

「よし、もう一度じゃ。」

…くそう、こんな老人相手に勝てないなんて…。

というわけで、俺は今カネ仙人と格闘ゲームで遊んでいる。それにしても強い。強すぎる。俺、格ゲー結構得意なのに…。

「裏技波状攻撃！」

「うわっ、また負けた…」

「つかっつか。しかし、お主は冴坊よりは強いとう。なかなかじゃ。」

「あ、ありがとうございます…？」

「あの子はゲーム好きのわりに腕がついて来ん。」

「そうなんですか？現実世界では強いのに…」

「おや、何か見たのか？」

「足払…下降旋風脚を…」

「あれを見たんか！？すごかったろう。あれはわしが探偵をやった頃、冴坊の父親に伝授し、それを冴坊が改良した秘儀なんじゃよ。」

「…本当に代々の探偵さんなんですね。」

「わしの爺さんもやっとなしのう。他の仕事に就いても、なんだかんだで誰かが継ぎよる。こりゃあ、血筋じゃの。」

「じゃあ、成田…さんも行く行くは…」

「つかっつか。行く行くどころか既にやっとなのわい。聞いとらんのかいな。」

「…はい。」

知らない事が沢山ある。学校では成田をずっと見てきたのに。

「ま、知らんで当然か。探偵家業は裏方じゃからの。…それにしても、冴坊が同級生にあの技を見せるとは。一体どういう関係じゃ？」

「いや、そ、と、特に何かというわけでは…」

「ほーん。こんな時間に一緒にいてか？」

「やつ、それは成田が勘違いを…」

「まあ、突っ走っとるのか、あの子は。」

「はあ…」

「仕方の無い子よのう。じゃが、楽しかろう？あの子とおると飽きんわい。」

「まあ…確かに…」

「ま、無理ない程度に付き合っやってくれ。」

お爺さんの悟ったような笑顔で、俺にも何かが分かった気がした。

「たっだいまー！」

「おお、遅かったの。」

「ごめん、ごめん。やってるスーパーちょっと遠かったんだ。ご飯、ちょっと待っててね。カネ仙人殿、台所拝借します。」

「えっ、作るの？」

「酷いなあ。作れるよー。」

早速始めている。あの動きは、母さんと似てる。やり慣れてる証だ。

「いや、弁当とかで良かったのに。気い使わせちゃって…」

「使ってないよ。戦闘時に備えて装備品も買ったら、予算的に作った方が安い事に気がついてさあ。」

「そ、装備!？」

「料理の心配はするな。味はわしが保障する。美味いぞ。ま、たまに材料の正体が分からんことはあるが…」

「しよ、正体不明ですか!？」

「つかっつか。冗談、冗談。中々面白いのうコイツは。」

「でしょ？」

成田が振り向いて笑った。

「わし等の周りでは珍しいタイプじゃ。」

「だよねえ。」

珍しい？俺が？俺みたいな普通の奴が珍しいなんて、成田の周りは一体どうなってるんだろう…。濃いキャラばっかなのか？例えばハセみたいな…そういえばハセ、ちゃんと家に連絡入れてくれたかな？

携帯を開けると母さんからメールが入っていた。『今度きちんと長谷川くんにお礼しなさいよ!』…連絡はしてくれたようだが、一体何と言ったのか…。

「はい。お待たせ。食べようぜー。」

「早っ!」

「だって適当だもん。」

とかなんとか言う割りに、ちゃんとした家庭料理が並んでいる。…しかもカネ仙人が言ってた通り美味かった。この点は学校にいるときから予想できたことだったが、実際に前にするとちょっと感動だった。

「うまいよ、すごく。」

「ほんと!？良かった。超うれしい!」

満面の笑み。…嬉しいのは俺の方です。

「カネ仙人、強いでしょ？」

「え、ああ、うん最強だよ。負けっぱなし。」

「くそー。村井君ならいけると思ったんだけどな…」

「え、なんで得意なの知ってるの？」

「ん？まあ、なんとなく。親指のどこタコできてるし。」

「そんなトコいつ…」

「手繋いだ時。」

“カタン…”

カネ仙人の手から箸が落ちた。

「手を繋いだじゃと？わしに嘔吐きおって…」

「いや、偶然なんです。」

「いいんじゃ…年寄りも蚊帳の外なんじゃ…」

「そんな、何も拗ねなくとも…」

カネ仙人は、体育座りをして、分かりやすい拗ね方をしている。

「どうしよう…、ねえ、成田…。」

「ふう、ごちそうさまー。」

早ッ、成田食うの早ッ！つつーか、全ての展開が超高速だよ！一応ついて行ってる…と言うより、引き摺られてるだけか…。

「チャララーラー、

なんだ、このレベルが上がったような音は！

「おっとメールだ…」

成田の携帯の着信音だった。メールを開くと暫く真剣な顔になった。

「どうしたの？なんか緊急？」

「…ミッション発生…」

と言ってにやりと笑った。

「今ウチが受け持つ依頼の一つに進展が。」

ちょっと待てよ、…嫌な予感が…。

「ウチは大体VIP相手の仕事がほとんどなんだけど、合間に私がちっちゃい事件もやってるんだあ。でね、依頼人は連帯保証人を引き受けたしがない町工場の職員。先月、依頼人が保障した工場長が負債を残し、金銭の一切を持って行方を暗ました。」

「よく聞く話だね…。それが、一体…？」

成田は俺の前に携帯の画面を突き出した。太ったおっさんの顔が写っている。

「オカムラツヨシ五十六歳、奴は昨日この町で携帯を購入している。先刻、この付近でそれを使用した模様。」

「なんで、そんな事が分かるんだ！？」

「…うーん。情報化社会って、怖いよね。」

違ーう！怖いのはそれを探れるお前等の方だ！

「うかつだったな、オカムラツヨシ五十六歳。近くに私がいるとは思ってもよらなかった事だろう…」

思わねえよ！普通！

「行こう！村井君！装備は完璧だ！」

成田が肩を叩く。

「ええ！ちょっと…」

俺もかよ！

「仙人！行ってくる。またねー！」

「おっ、お邪魔しました。」

ばたばたと居間を後にする。

「ほいほい。怪我きせきさせんようになあ。」

成田はスーパーの袋を持ち、俺を引張って爆走する。ダッシュってこの事だ。めちゃくちゃ早い。女の子、あまつさえ演劇部の人間がこんなに早いとは…。

「チャララーラー、

再び成田がメールを見た。

「…。南下している…。そうか！海…。漁船に乗るつもりか？そうはさせん！」

漁船かどうかはわからないと思ったが、付いて行くのに必死で言葉が出ない。港の倉庫群に入ったところで急ブレーキをかけられた。

「うわっ！急に止ま…」

「しー！あそこ！」

「え？」

「…目標、発見。」

本当にいるんかい！

「村井君はここにいる。私は向こうから回りこむ。」

言うが早いか、成田は倉庫の裏手に消えて行った。どうするつもりなんだ？俺は壁に隠れておっさんの様子を窺った。…カネ仙人、怪我させないようにって言ってたけど、大丈夫なのか？

「すいませーん。オカムラさんですか？」

うお！普通に話しかけてる！逆に不自然だ！

「…そうだけど、あんたは…？」

お前も答えるのかよ！

「私は、成田探偵事務所の者です。色々あって、あなたを連行させていただきます。」

沈黙が走った。オカムラさんも何がなんかわからないだろう。可哀想に…

「あっ、こら～！」

おっさんは状況が分かったのか、成田に背を向け急に走り出した！おっさんのスケールが徐々に大きくなる。これは、やばい。やっぱ、俺の方に来てる！

「村井君！下降旋風脚！」

「ええ！」

言われるがままに、片足を出してしゃがんだ。出来るわけ無いよ！俺は普通の…

「うわああ！」

おっさんがもんどり打って地面に転がった。

「村井君！ナイス！」

え？やったのか？俺がやったのか？

「もう、オカムラさん、逃げちゃダメだって…」

成田がおっさんに近づくと、おっさんはまた立ち上がろうとした。

「こら！おとなしくしない子には…」

成田！？これ以上何をする気だ！？

「ペイバックドロップ！」

「ぐへっ！」

おお！金返せ、とバックドロップをかけたのかあ。…って感心してる場合じゃない！

「成田！もうやめろ！カネ仙人が怪我させるなって言ってたの忘れたのか！」

「あ、忘れてた。ごめんね、オカム…あれ？気絶してる。」

「そりゃそうだろう！」

「てへっ」

「照れるな！誉めてない！」

「じゃあ、この隙に縛っちゃおうっと。村井君手伝って。」

成田はおもむろにスーパーの袋から縄を取り出すと縛り始めた。

「で一きた。」

「これって、まさか…」

「うんっ。亀甲縛り！」

「なんでそんなの知ってたんだよ！」

俺の突っ込みをよそに、成田は携帯をかけ始めた。

「あ、もしもし、お父？オカムラツヨシ捕まえたよ。…うん、縛って猿轡噛ましといたから大丈夫。どれくらいで回収される？…分かった。じゃあA3とA4の倉庫の間に転がしとく。今リアルRPGの途中だから切るね。はい。またねー。…よし。じゃあ、ついでだから浜に探検に行こう！」

突っ込みどころが多過ぎて対処できないまま、浜辺まで付いて行った。大きな満月のおかげで辺りが少し明るく見える。こんなに長い時間女の子といるのは初めてだ。

「ここ、探検できる洞窟とか、ないね。」

成田は長い髪をなびかせて、ちょっと寂しそうに海を眺めている。改めて成田を見る。綺麗だった。切れ長の二重に、長くて濃い睫毛。無茶苦茶な行動に気を取られて分からなかったが、体は意外なほど華奢で、肌は陶器のようだった。学校では、ここまで綺麗なことに気付いていなかった。大体俺は、そもそも何しようとしてたんだ？…そうだ、告白だ。

「なあ、成田。」

「ん？」

今だ。今しかない。

「俺、別に人なんか殺してないんだ。」

「え…」

「噛んで、いい間違えた。説明しようとしたけど、成田聞いてないし、楽しそうだし、気が付いたらここまで来てた。」

「じゃあ、あの時…」

「一目惚れしましたって、成田が好きだって、そう言いたかっただけなんだ！」

成田がゆっくりと俺に向き合う。

「…。本当は、学校の私とは違うって知った今でも、同じように思う？」

「え…。」

確かに、今の成田は俺が思っていたのとは、違う。

「こんなテンションが続いても大丈夫だと思う？」

「う…ん…」

大丈夫…なんだろうか？自分が分からない。

「長い時間一緒だったせいで、判断力が鈍ってるってこと、ない？」

「…それは…」

返答に困った俺の中で、何かが弾けた。

「いや、っていうか、成田はどうなんだよ！」

「…どうって…」

「詰まるなよ！ダメならはっきり言えよ！人に聞いてばっかで、そんなの、卑怯！卑怯だろ！」

成田がはっと息を飲むのが分かった。

「…ごめん。そう、私、卑怯なんだ。そうだね。ごめん…」

「ごめんって、何が…」

「…。ごめんなさい！」

そう言った成田は、泣きそうな顔で走り去って行く。俺は立ち尽くした。ごめんなさいってなんなんだ？俺じゃ、ダメってことか？…そうか、俺、フラレたの、か…。泣きたいのは俺の方だった。

「…で、クリアしたからお前に貸してやろう。」

「…。」

「ネットの方、そろそろ引退して四天王の座を譲ろうと思ってるんだが…。」

「…。」

「おおい！良二！ゲームしに来たんじゃないのか？」

「あ、何？」

「何？…は、こっちの方だ。」

「うん…。」

「成田冴か？」

「…。」

「例の一夜から見てないな。一週間くらいか。」

「六日。今日で六日見てない。」

「おお、明日から夏休みか。道理で授業が少なかったわけだ。」

「そうだな…。」

今日は終業式だった。今日は来ると思ってたのに…。

「…お前、お前の言うところの『普通の成田』が好きだったんだよな？」

「…うん。」

「で、その『普通の成田』は実のところ、お前の思う普通とは違った。」

「大違いだよ。」

「という事は、もうなんとも思っていない、ということだよな？」

「当たり前だろ？勘違いだけで突っ走るし、リアルRPGとかわけのわからない事急にはじめるし、変な必殺技繰り出すし…。」

「ま、変わっていると言えば変わっているな。」

「大体、私服の布の面積狭すぎだよ。あんな姿他の…」

「…奴らには見せたくない。」

「その通り！」

「へえー…。」

「ちが…。そういうんじゃないで、俺の思ってたのと、全然違ってたって言いたかったんだよ！…もういいんだよ。終わったんだから…。なんとも思っていない！」

「ふん、そうは見えないな。」

「だから違うって、さっきから…。…はあ。って言うか、言っただろ。フラれたんだって。俺がどうのって言う前に、終わってんだよ…。」

「その事についてだが、もう一度お前が告白した箇所を復唱してくれないか？」

「お前なあ、人の傷に塩を擦り込むのがそんなに好きか？」

「傷付いてるのか？」

そう、俺は傷付いていた。

「…くそっ。」

「ほら、早く話せ。詳しくだぞ。」

「…だから、成田が浜に行くって言い出して、時間かなり遅いし、そろそろかなと思って、本当の事言った。勘違いだって、俺はあの時成田が好きって言いたかっただけだって…」

「なるほど。成田冴の方は？」

「ごめんなさいって。」

「それだけか？」

「…いや。学校とは違う成田を知った今でもそう思うか、とかこのテンションが続いても大丈夫か、とか質問攻めにするから…。ちょっと怒鳴っちゃったんだ…。」

「おお。珍しいな。なんて怒鳴った？」

「成田はどうなんだって、それってなんか卑怯だぞって。」

「成田冴の質問には答えてないんだな？」

「一瞬詰まったんだよ。元々は普通の成田が好きだったわけだし…。急に聞かれても考えられなかった。」

「それから？」

「ごめんっ走って行ったきり、会ってない。きっとこのまま夏休み明けまで顔合せない様に気を使ってくれてるんだよ。」

「まあ、確かにアイツは意外と気使いだからな。お前と違って。」

「悪かったな、気が使えなくて！」

…ん？…アイツ…？

「しかも、アイツも破天荒なわりに傷付き易いしなあ。」

…なんで、そんなことを…？

「ハセ？…お前、今、アイツって、言った？」

「言ったが？」

なんだ？にやっとしやがって…おい、これはもしかして…

「知ってたのか…？」

「何をだ？」

「成田の事とか、あの日の事とか…」

「具体的に聞かれなかったから答えてないが、俺と成田冴は幼児期以来家族ぐるみの長い付き合いだ。しいて言うなれば、戦友か。」

「せ、せんゆう…？」

「お前も知っている通り、俺の親父は弁護士だ。そして成田冴の父親は現在の『何でも探偵』を継ぐ以前、刑事だった。職場も家も近いとなれば奴等に友情が芽生えるのも、想像に難くないだろう。」

「ま、まあ…。」

「その上俺は優秀なハッカーだ。成田冴の父親の依頼を受け、俺がデジタル情報を引き出し、やばくなったり、探偵業の域を超える事態が発生した場合、俺の親父の事務所に横流しされる。因みに成田冴自身もこの流れのサポーターとして組み込まれている、という寸法だ。」

「だ。…って…？」

「だから、戦友だ。」

「お前！成田の情報極限に少ないって言ってたじゃないか！」

「ああ、あれは嘘だ。そういう事にしておけと言われた。」

「おい、じゃあ、成田があの時捕まえたおっさんの情報流してたの…」

「全く間抜けな奴だな。仕方ない。口止めされたが、全てを明かしてやろう。」

「すべて…？まだ、あんのか？」

「まず、先に好きになったのはお前じゃない。成田冴の方だ。」

「なっ、何がどうなってんだよ！成田が俺を好きって？嘘つけ！ごめんなさいって…」

「最後まで話を聞け。落ち着きの無い。とにかく、何をどう見たのか、アイツはお前の様な間抜けに惚れたわけだ。そこで、戦友としてお前の好みを教えてやった。『あの馬鹿は普通の女が好きだ』と。それでアイツは努めて普通を通した。二年近く、お前が成田冴に目を付けるまで。運の良い事に、俺が直々に動き出す前にお前は成田冴が好きだと言い出した。理解し難いが、アイツは普通を演じる事が楽しかったらしい。だが、二年目に来て、何故か急に、本当の自分でなければ意味がないと言い出した。それで、ならば全てを曝せばいいと言っていたところに、都合良くお前が告白しに行ったわけだ。後は…お前が一番知ってるだろう？」

「じゃあ、俺が噛んだのも計算…？」

「ああ、それは違う。二人になる口実を模索中に、幸か不幸かお前がおかしな事を口走ったから、それに乗ったらしい。」

「なら、なんでごめんなさいって…」

「だから、だろ。俺に口を嚙ませたり、お前に好かれる為に演じてたり、…。卑怯と言われて言い返せなかったんだろうな。しかも結果は一晩中わけのわからんゲームでお前を振り回した。それで、お前が答えに詰まったように、アイツも詰まって出た言葉が、ごめんなさい。」

「じゃあ、俺達は…」

「百聞は一見に如かず。俺の見たところお前はまだ…というかあの日から本格的にあいつを好きになっているように見える。そして、成田冴がお前と会わないようにしてるのは、これ以上嫌われたくないから、だそうだ。」

「両想いつてことか？」

「…俺はあまり、そういう俗物的な表現は好まんが…。そういうことだ。」

行かなきゃ。俺は立ち上がった。走り出そうとして、気が付いた。どこにいるのか知らない。携帯もメールも知らない。

「ハセ！お…」

「あいつは現在部室に待機させてある。」

「待機…？」

「俺が呼んでおいた。最後の審判を待つように言っている。」

「お前、いい奴だな！」

「…。早く行け。」

俺は走った。あの日と同じように。いや、同じじゃない。自分でも驚く程の速さで走っている。今ならちゃんと答えられる。学校と違う成田でも、あのテンションが続いてもいい。むしろそれが好きになったんだ。大体『普通』って何だよ。そんなのあつてないようなもんだ。そんなモノより、確実に目の前に居るものの方が大事だ。部室のドアは、あの日と同じように閉まっていた。

“ガラガラッ…”

「成田！」

成田は、窓辺に腰掛けて、俯きがちに俺を見た。

「…聞いた？」

「聞いたよ。」

「…ごめんなさい。」

「それを聞きに来たんじゃない。」

しっかりした足取りで、成田に近付いた。今日は制服を着ているが、眼鏡も三つ編みもない。これが、本来在るべき成田なんだ。

「怒ってる？」

「…。怒ってるよ。」

「…。」

成田は更に俯いた。

「成田にも、ハセにも、自分にも！最初好きだと思ったのは、確かに学校での成田だったけど、今は違う。俺が見た全部の成田が好きだ。」

「他にもまだ…」

悪戯を見つけた子供みたいだった。

「あつてもいいよ。ハセも知らない事とか…むしろ知りたい。」

「許してくれる？」

「俺の気持ちに応えたら、許す。」

「私は、ずっと、大好きだよ。」

「よし！」

成田を抱きしめた。力いっぱい。お？…俺ってこんなだったけ？まあいいか。楽しいし、俺は今、最高に幸せだ。

「ねえ。」

「ん？」

「…これって、リアル恋ゲー…。」

「えっ…」

結局、運と力技で、俺は成田に嵌められたのかも知れない。今後、この最強のリアルゲーマーに巻き込まれていくのは必至だ。今年の夏はきっと、人生最大の何かがある気がする。俺みたいな凡人が、どこまで付いて行けるか分からないが、それもいいか。特別な奴の特別になるのはすごい事かもしれない。普通じゃなくたっていいじゃないか。いいに決まってる。普通に基準なんてないんだから。…多分…。

「あいつを助けてくれ！頼む…」

膝を付いて、泣き崩れる。今やっと、全てが解った――

「断る。」

きっぱりと言い放つ。最近、何故か苛ついているせいもあるのか、そのまま親父からの電話を切った。俺は親より遥かに明晰な頭脳を持って生まれた。親父はそれをよく解っていると思っていたが、違ったようだ。俺も親父の事は認めているつもりだ。弁護士・^{はせがわ とうま}長谷川冬馬という名を耳にしたことの無い奴は、おそらく日本にはいないだろう。が、俺は依頼人ではない。当然、指図を受ける謂れはないという見解を持っている。それを…

『お前も弁護士に…』

と、自身の母校である東京大学の法学部に進学を勧めるとは、一体どういう見だ。俺には俺の道がある。俺を生み出した責任としての金は受け取ってきたが、それ以外俺は殆ど一人で生きてきた。俺が両親に何かを求めた事等、一度もない。

俺は荷物を纏め、家を出た。向かう先は、唯一俺が友と認めた男の下。言っておくが、俺の頭を持ってすれば、東大合格など灯を見るより明らかだ。しかし、まず第一に俺は大学と言うものに興味が無い。学ぶべき事も、知るべきこの世の法律も、判例に至るまで、既に頭に入っている。第二に、弁護士の仕事には明確な回答が用意されていない。1 + 1 = 2 でなければいけないのだ。直接的な、他人とのコミュニケーションほど、予測し難いものはない。そんな不正確なものを生業にするなど、俺にとっては持つての他だ。

“ピンポーン”

奴の家の呼び鈴を鳴らす。

「はい。どちら様です…あら！風馬くんじゃない。さ、上がって。」

「失礼します。」

「良二ー！風馬くんが来たわよー！」

この気さくな女性は、友人、村井良二の母親だ。俺の母親とは似ても似つかない、尊敬すべき母親だ。俺の母親は『長谷川風馬の母親』というより、『長谷川冬馬の妻』と言った方が的確だろう。

「丁度良かったわあ。もうすぐ夕飯なのよ。食べるでしょう？」

「いただきます。」

「それにね…」

ダイニングキッチンに入ると、台所から菜箸を持った女が飛び出してきた。

「ふーたん！何々！？突撃隣の晩ご飯しにきたの！？」

成田冴だ。コイツは俺の友人に初めて出来た彼女であり、俺自身と旧知の仲でもある。コイツは俺を『ふーたん』と呼ぶ。無論、そんな事を許したわけではないのだが、コイツの耳には今だ届いていない。

「いたのか。」

「うん！夏休みだから、良君ママさんのお手伝いして、ママさんも夏休みにしてあげるの。」

「…。そうか。」

相変わらず、聞いてもいないのに訳のわからん返答をしてくるが、慣れというのは恐ろしいもので、今やコイツの頭の中でどのようにしてこの答に至ったかが、手に取るように解る。

「ほんと、おばさん助かるわあ。良二みたいな平凡な子がこんないい子連れてくるなんてねえ。」

「おばさん、コイツの根は決して悪くないとは思いますが、少々奇怪な面が…。お前、また猫被ってるんじゃないのか？」

「そんなことないもーん。ママさんとは色々いっぱい話したんだよ。」

「…。例えば？」

「私が生まれてからのアドベンチャーとか、良君との馴れ初めとか、リアルRPGの事とか。」

「あれを話したのか！？…おばさん、いいんですか？こんなので…」

「あら！一ーのよ。これからの時代、女の子こそ強くなっちゃね。特にウチの良二みたいな…。そういえば、あの子降りてこないわね。」

「良君、さっき寝るって言ってたから、聞えてないのかも。うーん…」

成田冴が腕を組んで黙った。多分、どうやって起こしたら、より面白いかを検討しているのだろう。こういったことを考え始めると切が無い上に、ろくな事にならない。俺はすっと階段の下に行き声をかけた。

「良二！起きろ！成田冴の暴走が始まったぞ！」

“ガンッ、バタンッ、ダダダダ…”

二階から血相を変えた友人が、転がるように降りてきた。

「冴！早まるな…ん？ハセ！？」

「飯だぞ。」

「ヒドーイ、ふーたん。私が折角色々考えてたのに…」

「えっ？えっ？…ちよっと…。」

「やっと起きたわね。さあ、ご飯にしましょうか。みんなお腹空いてるでしょ。」

憐れな友は事態が飲み込めていないが、皆さっさとダイニングに行き、食事が始まった。俺の家では出てこない、所謂『家庭料理』が並んでいる。

「どう？風馬クン、美味しい？」

「はい。とても。」

「良かった。じゃあたくさん食べてね。」

「今日は、お父さんと弟さんは？」

良二には、^{こうた}孝太という小学三年生の歳の離れた弟が居る。弟の方が頭も容量も良い。因みに孝太は自分の兄より俺を尊敬し、成田冴が大のお気に入りだ。そして、元野良猫のノラも成田冴が好きらしい。

「孝太は友達とキャンプに行ってるのよ。お父さんは、夕飯いらなくてさっき電話あったから。まったく、もうちよっと早く電話してくれれば助かるのにねえ？」

「母さん、そんな事ハセに言ったって、返事に困るだろ？大体、母さん喋りすぎ…」

「いや。こんなに美味しい物が待っているのに、食えないなんて親父さんは運が悪い。」

「ははは。ハセ、お前結構口がうまい…。」

「あら、良二、これ冴ちゃんと作ったのよ？」

「良君…。美味しくない？…」

成田冴がうつむいて、声を震わせた。こういう時は…

「うわっ、いや、そういう意味じゃなくて、泣かないで…。」

「うん。泣いてないよ。」

「やはりな。」

「冴ちゃん、さすが演劇部ねえ。」

「はぁ…。大体、ハセがうそ臭い事言うから…。」

「俺は、嘘は言わない。」

多分、成田冴と良二の母親の料理は美味しいのだと思う。多分、と付けたのは、『家庭料理』の比較対照が他にないからだ。俺が初めてこういう料理を口にしたのは、小学5年の時。奇しくも、この成田冴の作った弁当の残り物だった。考えてみれば、そんな家庭環境でよくグレずに育ったものだ。まあ、頭の出来が良すぎて、学問以外に興味を持てなかつただけなのだが。

「つつ一か、ハセは何しに来たんだ？」

「うーんと、私は知らない。ママさんは？」

「あら、良二が呼んだんじゃないの？」

「え、俺、呼んでないよ。」

「大きな荷物持ってたから泊まりに来たのかと…。」

ノラが俺の荷物の上で寝ている。

「あ、ほんとだ…。ハセ？なんか、あったのか？」

「いや、特に何と言うわけではない。が…、親父と少々揉めた…というか、断った…というか。」

「おいおい、ちゃんと説明しろよ。」

「うむ。親父に、東大法学部に進学し、弁護士になれと言われて、断った。」

「なんでだよ。ハセなら楽勝なんじゃないか？」

「当たり前だ。俺は、大学にも弁護士にも、興味が無いから断ったんだ。俺には俺の道がある。」

「まあ、それはそうだけど…。で、この荷物は…？」

「俺の資金源は親父から出ている。スポンサーの意見を取り入れないということは、契約を解除したも同然だ。不動産も資金と見なせば、俺が家を出るのは当然の事だろう。」

「は？…なっ、それじゃ、家出かよ！」

「そういう言い方はあまり好まん。」

「言い方はどうだっていいだろ！？いや、お前どうするつもりだよ。学校は！？まだ夏休み入ったばかりだよ！？卒業は…」

「休みに入ったばかりだから、だ。」

「はあ？」

「丁度いい時期だ。休みの間、俺個人の資産を増やす。株にはもう手を付けてあるから、後は操作するだけだ。そこで…。」

「な、なんだよ？」

「どうだろう、資産の増額と新居の目処がつくまでの間、ここに居候させてはもらえないだろうか？勿論、金が出来た時点で生活費等はきちんと支払うつもりだ。」

「そんな事…金はどうでもいいけど、それ、ちゃんと親に言ったのか？」

「ちゃんとも何も、契約を断ったんだから、わかるだろう。」

「いや、お前、それは…。ちよっと、母さんも、冴も、食ってないで何か…。」

「あら、お母さんは全然構わないわよ？ご飯美味しいって言って食べてくれる、賢くてカッコいいコなら、何人いても。風馬クン、好きなだけ居ていいわよ。」

「母さん、そういう事じゃあ…。」

「片付け、母さんがやるからみんなで話さないな。」

「逃げられた。こら…冴、食べる真似しないで何とか言え。」

「ははは…。バテた？これは流石に至近距離だとわかっちゃうかあ。」

「話を逸らすな。」

「だって…。ほんとに私の意見言っているの？」

「いいよ。」

「言うがいい。」

「じゃあ、僭越ながら、核心へ迫っていきたいと思います。ママさんも気付いてるんだと思うんだけどね。それで、ああ言ってくれていると思うの。」

「気付いて言ってるって、何を？…ハセ、さっきからだまってるけど、お前は解ってるのか？」

「いや、皆目見当がつかん。」

「ふーたん…。これは、反抗期です。」

「ふん。この俺がそんなものは…」

「チェック項目その一。ふーたん最近、苛ついてない？」

「…。いや…」

「あ、俺もそれは思ってた。最近苛ついてるよ、ハセは。こないだの終業式の後、皆でゲームしてた時だって、いきなり電源切ったじゃん。」

「それは、成田冴にゲームの才能がなさ過ぎて、話にならなかったからだ。」

「でも対戦してたのは俺と冴だったじゃないか。」

「つまらないものを見せるからだ！」

つい、声が荒くなった。

「ほら。苛ついてるじゃーん。」

「うるさい。」

「まあ、反抗期は、遅かれ早かれ皆が通る道なんだよ。因みに私は小四の時に派手に来て終ったけど、ふーたんは親の言うことに、逆らったことなかったじゃん。」

「逆らうも何も、お互いに興味がなかっただけだと思うんだが…。」

「それは…、否めないけど…。あ！高校受験の時だって、もっと上狙えたのに、私と同じトコにしたじゃん。あれも、ふーたんの父上に、私の事お守りしてくれって頼まれたからでしょ？」

「そうだが、あの時は親父がお前の父親に頼まれたわけだから、俺が従ったのはお前の父親の方だ。」

「それ、初耳…。」

良二がなんとも言えない、留守番させられたときの子犬の表情をしている。この顔を見ると、苛つきが少し収まる。予測通りの反応をする奴は、からかい甲斐があつて良い。

「うーん、そっか。えーっと、じゃあ…。」

「ところで、チェック項目の次は何だ？」

「いや。もうないよ。」

「…。全く。それじゃあお前にとって苛ついている人間は、皆反抗期ということになるじゃないか。」

「みんなじゃないけど…。だって、天下のふーたんが父上と意見が合わないくらいで、いきなり家出するなんて、他に考えようがないんだもん。良君はどう？」

やっと話を振られた良二は、暫く考えてから答えた。

「他にもあるとは思うけど、冴の言うことも分かる気がする。」

「どうしても、反抗期にしたいらしいな。」

「じゃあ、何か他の理由があるのか？」

「…。特に思いつかん。」

「じゃあ、まあ、反抗期の^{はんちゆう}範疇^{はんちゆう}って事になるんじゃないのか？」

「…そうだ、と言わざるを得ない雰囲気だな。俺は金以外、殆ど一人で生きてきた。親父とも母親とも、親子と呼べる関係を築いているとは思えん。それで反抗期というのも、今更という気がするのだが。」

「それにしても、なんで急に反抗期になったんだろうね。きっかけに思い当たるの？」

「…ない。」

「まあ、ここは一つ、なんか思い切った事をするに限るね。」

「何を、すればいいんだ？」

「わあ…。ふーたんが私の事頼ってる！ちょっと感動！とりあえず、今みたいな普通の家出じゃダメだね。キーワードは未開の事と場所。」

「それは何だ？」

「海！明日、海！」

「それは単に、お前が行きたいだけじゃないのか？」

「うん！夏は海！皆で仲良し海水浴！」

また苛ついてきた。

「お前は、いつも人を振り回す事しか…」

「イカ焼きでしょ、花火もしたいし…。」

空を見ながら指を折って、やりたい事を喋り続けている。完全に意識が海へ飛んでいる。

「貴様、人の話を…」

「よせよ、ハセ。冴はもう、俺達の手の届かない世界に行ってるよ…。」

成田冴の犠牲者、良二が、珍しくドライに言った。

「良二、お前、動じなくなったな。」

「はは…。まだまだだよ。じゃ、今日はまあ、俺ン家に泊まれよ。冴は帰るんだろ？」

妄想娘がフリーズした。

「ヤダ！」

「…って、何が？」

「ふーたんが泊まるなら、私も泊まる。」

「おいおい、それ、どういう意味…。冴は帰りなさい。」

微妙な顔で、成田冴と俺を交互に見た。

「サエは『仲間はずれ』にサレタ。HPが10減った。」

成田冴は自分で解説を付けると、部屋の隅でしゃがみこんだ。

「なんだ、そういう意味か。」

良二は安堵の声を漏らしてから、成田冴の側に寄って優しく語りかけた。

「いや、仲間はずれじゃないよ。明日の海の準備…、『装備』が整ってないだろ？冴は。」

「っ！うっかりだったよ！そうだね。私帰る。ママさーん！明日海だから帰りまーす！お邪魔しました〜。」

「あらあら、なんだか楽しそうね。冴ちゃん、今日も助かったわ。ありがとうね。気を付けて帰るのよ？」

「はい！じゃあ、また明日ね！二人ともオヤスミ！」

「お、おやす…あ！送ってく…」

“ガチャ、パタン…”

誰にも喋る隙を与えないまま、成田冴は帰って行った。つくづく、竜巻の様な奴だ。

「案ずるな、良二。アイツは殺しても死なん。」

「でも、一応女の子だし…。つつても、もう行っちゃったけど。あ、ハセ、先風呂入れよ。」

良二の好意をありがたく受け、暫くして、俺は良二の部屋に上がった。以前はよく、二人でゲームをしたものだ。だが、最近は成田冴が加わっている事が多い。俺の家にも、以前はどちらか一方しか来なかったが、最近は三人になった。成田冴の家でも、同じ現象が起こっている。俺は今まで個人的な他人との関係が、二人以上になった事はなかった。嫌ではないが、二人位が気楽でいい、と思う事もある。

“カチャ…”

「布団、持って来たよ。」

「ああ、すまん。」

「今日は早く寝た方がいいかもな。冴の事だから、早朝6時くらいに起こしに来そうだから。」

「言えてるな。」

「さっき聞けなかったけど、家出するほど曲げたくない、ハセの道って、一体何なんだ？」

「うむ…。」

「将来の夢って、聞いたことなかったよな。そう言えば。」

布団に入りながら問いかけられた。早く寝た方がいい等と言っていたわりに、長くなりそうな話題を振ってくる。良二も久々のこの状況を楽しんでいるのか。

「俺は、何にでもなれる頭を持っている。」

「それは分かっているけど、なりたいものがあるから、親父さんと意見が合わなかったんじゃないのか？」

「…。」

「…まさか、特に何も無いんじゃない、よ…な？」

「なりたいもの等と、限定するのは、正に凡人の思うところだ。俺は非凡だ。」

「…で？」

「…特にない。人に指図されたくなっただけだ。」

「ないんかい！それじゃ、冴の言う通り、ただの反抗期じゃないか！」

「だから、さっき認めただろう。」

「そうだけど…。そういうところ、冴と似てるよな。」

「どこがだ。あんな無鉄砲な奴と一緒にするな！全く、気分が悪い、俺は寝る！」

自分の布団を敷いて、電気を消した。

「苛ついてるなあ。…だって、冴は探偵を継ぐ気満々だけど、その為に資格とか考えてるようには見えないし。…似てないか？」

「どうにかなる、という点では似ているが、方向性は真逆だ。」

「うん。ハセは理性的だから、わりと分かり易いけど、冴は掴みにくいよ。ほんと。」

「あいつは単純なだけだ。」

「単純だけど、ミステリアスっていうか、今一油断できない。」

「そうか？俺は分かるぞ。」

「ふあ…、例えば？」

欠伸と共に聞いてくる。人の眠りを妨げておいて、眠りに落ちつつあるようだ。

「あいつの寝相が極端に悪いのは、頭より体が先に反応することの証だ。」

「へえ、寝相ね…。」

半分寝ている様な声だ。

「ああ。あいつの寝相は最悪だ。」

「ふーん。最悪ね…ん？寝相？何でハセが…」

良二の声がはっきりしてきた。起きたようだ。よし。俺は良二に背を向けて目を瞑った。

「おやすみ。」

「おい、お前、何でそんな事知ってるんだよ！おい？ハセ…」

寝たふりを決め込んだ。

「…もう！寝られないじゃないか！」

客を差し置いて先に寝ようとするからだ。馬鹿め。これでやっと眠れそうだ。

「おっはよ〜！」

翌朝、成田冴は、本当に6時に起こしにやって来た。こいつに謎めいたところなど、一つとして無い気がする。

「おはよう…、冴は、朝からテンション高いなあ…。」

当然、俺と良二は起きたばかりで、喋るのも億劫なほどだ。

「うん！私はいつもハイパーテンション！」

「馬鹿者。それは高血圧の事だ。」

「そっか、私寝起きいいから、高血圧かも！」

面倒なので放って置く。良二も眠りが足りないのか、話に入ってこない。

「みんなのテンションはどん底だねー。あ、ふーたんの寝起き悪いのって、低血圧のせいなんじゃない？」

「！？寝起き…！？」

半開きだった良二の目がカッと開いた。どうやら昨夜の話を引き摺っているらしい。面白くなってきたので、俺の頭も冴えてきた。

「あの頃は、お前の寝相が悪くて眠れなかった為に機嫌が悪かっただけだ。」

「お泊りの時だけの事じゃないもん！」

「泊まり！？」

良二の声が裏返っている。

「そうだよ。でも、そうじゃない時も、朝ご飯作りに行ったら怒って、食べてくれなかったじゃん！」

「食べたぞ。」

「残した！」

成田冴は良二の様子を気にすることなく、ふくれっ面で俺を見ている。

「お前な、朝五時に叩き起こされて、かるく四人分はあるだろう朝飯を残さない奴が居たら、見てみたいものだ。」

「私二人分は食べれるもん！」

「お前がおかしいだけだ。しかも俺はちゃんと一人前は食っただろう。」

「うーん、そっか。私が二人分でふーたんが一人分だから、…三人分。計算間違えた。一人分多かったから残って当然…。」

ふくれっ面の空気が抜ける。

「お前×2、で考えたら、四人分で合ってるがな。」

「ホントだー。アハハ。ごめんね、ふーたん。仲直り！」

無理矢理握手させられる。横目で良二を見ると少々震えている。そろそろ切れそうだ。

「冴…。寝相って…？泊りって…？」

「ん？そうそう。お泊り合戦。懐かしいねえ。小学校の時、よくやらなかった？」

良二の目から殺気が消えた。心の中で舌打ちする。もう少しで切れそうだったのに、成田冴のコントロールに失敗した。

「小学校か、なんだ、じゃあ寝相も…。」

仕方ない。他のネタを検討するとしてよう。

「俺は、いつとは言っていない。」

「いやあ俺って馬鹿だなあ。」

「馬鹿？何が？良君お馬鹿さんじゃないよ？」

「いや、何でもない。…けど、小学生の時から料理してたんだ、冴。」

「うん。小四の時お母が死んでから、やるようになった。ふーたんもお葬式で会ったんだよね。」

「ああ。あの時初めてこいつが家に泊まったんだが…。母親が亡くなったショックで眠れないんじゃないかという心配を他所に、俺の布団に入るなり寝入った。あまつさえ余りの寝相の悪さに俺の方が一睡もできなかった。」

「いやあ、葬式って疲れるよね。」

「そういう問題じゃないんじゃないか…。っていうか、一緒の布団で寝たのか…」

「ふーたんのベッドは高級だから、ほんとにオヤスミ三秒だったよ〜。」

「こいつが俺のベッドに味をしめて、一日置きに来るようになったせいで、俺は不眠症になりかけた。」

「…同じ布団…一日おき…」

良二の顔色がまた微妙になってきた。おお、なんと清々しい気分だ。

「まあ、昔話は置いて、二人とも、装備は完璧ですか？」

「えっ、いや、まだだよ。」

「じゃあ早く！手伝うから！」

バタバタと用意させられ、一時間後には飯まで食わされていた。こんなに早く準備して、こいつは一体、俺達をどこまで連れて行くもりなんだ。…いや、違うな。遠くじゃない。むしろ普通に考えれば近いに違いない。そして冒険らしくないという理由で、こいつは極力、公共の交通機関を使わない。ということは…

「湘南辺りか？」

「うん。」

「徒歩か？」

「それがどうかした？」

「ええっ！？歩くの！？それは、ちょっと、時間かかるんじゃ…」

「だから、早く起こしに来たんだよ？じゃあ、走る？そしたら…」

「俺はせめて電車でなければ、ここを動かんど。」

「えー。電車じゃ冒険っぽくない…。どうしても？」

「俺は譲らんど。お前のような体力馬鹿とは違うんだ。」

「良君もヤダ？」

「う、うーん…。嫌…かな…。」

乾いた笑いで誤魔化そうとしているが、相当嫌に違いない。少なくとも俺は、考えただけでぞっとする。

「仕様がなあ。じゃあ、バスは？」

どうもこいつは地方性の高いものが好きらしい。

「…いいだろう。手を打とう。」

「良君は？」

「OKだよ。」

かくして、俺達はバスに揺られ海辺に向かった。予想通り、交通機関を使うと、六時に起こされた事が馬鹿馬鹿しくなるほど近かった。それにしても、休暇というのはどうしてこうも世間を浮き足立たせるのか。朝と言っていい時間に訪れたにも関わらず、浜は人で溢れている。着いた途端に帰りたくなった。人込みの嫌いな俺が、渋い顔をしていると、成田冨が水平線の彼方に見える小さな島を指差した。

「あれ！あそこに行こう！あんだけ小さいなら、人いないよ？」

「それは、そうだけど、どうやって行くの？」

「船！」

「いや、そりゃそうだけど、船はあるの？」

「じゃあ、手に入れるか…。」

成田冨が含みのある言い方をして、にやりと笑った。

「じゃあって…、なんか、ちょっと恐いんですけど！」

良二が目助けを求めた。俺は今暑さと人込みに、良二をからかう気力も失っている。

「大丈夫だ。どうせ、あっちに停泊している船に乗せてもらうとか、その位だ。」

「そ…そっか。」

「ほら、見ろ。」

成田冨があつという間に、船のある方に走って行った。俺達が船着場に到着する頃には、一人の船主を捕まえて、交渉に入っていた。

「どうしても、あそこの島に行きたいんです。」

「あの島はやめろ。大体俺あ、タクシーの運転手じゃねえんだ。人は乗せねえ。」

三十代後半に見えるその男は、ハニーハント号と書かれた船の側面を磨きながら、吐き捨てるように言った。天然パーマのぼさぼさ頭に、無精髭。あまりものを頼みたくない人種に見えた。

「私の家、探偵だから、お金の代わりに浮気調査とか…。」

「金もいらねえし、乗せねえつつたら乗せねえんだよ！島に近付くな！」

男は声を荒げると、手に持っていた雑巾を船に投げ入れ、海とは反対の方向に歩いて行った。

「おじさーん！待って…」

「やめておけ。あの様子では絶対無理だ。」

「そうだよ、冨。あんまり良さそうな人じゃないし。」

成田冨は俺達を交互に見やっ、頷いた。

「断られちゃったね。プーさんに。」

「プーさん？…ああ、ハニーハント号だからね。」

「ハニー、蜂蜜。ハント、狩り。…密猟船…だったりしてね！」

「リョウの字が違わないか？」

「まー、いーじゃん。細かいことは、それにしても、あの島なんか出るのかな？」

「馬鹿馬鹿しい。」

「だって、島の事言ったら、目の色変わったよ、あの人。なんかあつたんだよ…」

成田冨が長い髪をぼさっと前に垂らし、その隙間から片目を覗かせ、良二に縋り付いて奇声を発した。

「…あ、あ、あ、あ、…。」

「冨！やめろ！俺はその手の話は…」

良二が怯え出す。面白いので、成田冨の話に乗る事にした。

「姥捨て山のごとく、捨てられた老婆の怨念…。はたまた、あの島で文字通り男に捨てられた女の残留思念か…。」

「ひいっ…。やめろよ！」

「私どうしてもあの島行きたくなっちゃった！」

「行かない！って言うか、行けないだろ！なあ、ハセ？」

「いや、俺も行きたい。」

「ほらな。行きたいって…。ええ！？行きたいんすか！？」

「悪いか？」

「なんで！？ハセらしくないよ！」

俺は決め付けられるのは嫌いだ。

「らしさというアイデンティティは他人が決める事ではない。」

「いや、そう、だけど…。あれ!? 冴は!？」

「いないな。いつもの事だ。どうせすぐ戻って来る。」

俺と良二が日陰を求めて岩陰に近付くと、岩場の向こう側から成田冴が満面の笑みを湛えて駆けてきた。犬でも飼っているような気にさせられる。こちらが見失っても、向こうが勝手に見つけて戻って来る。成田冴は鼻が利く。勤が良過ぎるのだ。しかし、その勤の良さが社会の生産性に貢献しているところは見たことがない。

「船発見〜！」

「うそだろ!? マジで!？」

「うん! あっち!」

成田冴が、俺達を岩場に引張って行く。大きな岩があり、その裏は浜からは見えない。付いて行くと、白い物が見えた。

「これ!」

「っ! …こ、これは…!」

「…なんてものがあるんだ…」

そこには、半分斜めに打ち上げられた様子の、船…

「わーい! スワンボート〜!」

そう。それだ。湖畔や公園内の池に見られる、足漕ぎ式の、あれだ。

「…一体何故、こんな物が、こんな所に…。」

「ははは…。ハセ、それはきつと、冴がここにいるからさ…。」

良二は遠い目で笑っている。この不可解な事態を、『成田冴 + x = 何でもあり』という方式を使うことで乗り切ったようだ。

「…。…いや、うん。そうだな。」

思考に収集がつきそうにないので、俺もその方式に則って納得することにした。

「よーし! みんな早く乗って! みんなが乗ったら、私が蹴って、引っかかっているの外して、飛び乗るから。」

「え!? 俺がやるよ。危ないだろ?」

「良君じゃ無理。余計危ない。いいから早く乗って!」

良二は少し迷ってから中に入った。多分、彼氏として、男としてのプライドから出た言葉を一蹴されて反論に出ようとしたが、成田冴の身体能力が自分を遥かに上回っている事を思い出したのだろう。

「いい? 行っくよ〜。えーい!」

“ガンッ”

「ほいっ。」

成田冴は言った通り、スワンボートを岩から解放してひらりと飛び乗った。少し揺れただけで、後は何事もなかったように、間抜けなスワンボートはぶかぶか海を漂い始めた。こいつの身体能力は、人間離れているところがある。動きはまるで、重力を感じない。そう告げると、珍しく嬉しそうな、恥ずかしそうな顔で笑った。

「お母のDNAかもね。…ちょっと、ふーたん。漕がないなら代わってよ〜。」

「なんだ、漕ぎたいなら早く言え。」

代わってやると、また嬉しそうに笑っている。機嫌が良いらしい。良二もそれを感じたのか、口を開いて何か言いかけたが、やめた。

「…なーに?」

「え!？」

「何か言おうとして、やめた。言っていいよ。」

素晴らしい勤。ずっと前を向いていたにも関わらず、だ。

「…あー、ええっと、お母さんのDNAって言ってたから、どんな人だったのかと…。」

良二が気まずそうに言った。成田冴の母親は、俺達が小学四年の時に他界している。良二がためらったのは、機嫌の良い時にわざわざ聞かなくてもいい話題だろう、という彼なりの気遣いだったのだろう。だが、それは間違いだ。こいつは機嫌の良い時こそ、母親の話をする。

「なんだ〜。それか。お母はねえ、伝説のストリッパーだったの!」

「ストリッパー!？」

「うん。伝説の。ふーたん、私文章力がないから、代わりに喋ってー。合の手は私が入れる。」

そう、こいつの致命的な欠陥は、頭は良いのに『説明』が出来ないところだ。余談だが、中学の数学の試験で、証明の問題の解答欄に『話すすと長くなるし、普通に考えたらこうなったから。』と書いてバツを貰い、その後『話すすと長くなる』部分を、教師にストーリー仕立てで一時間ほど喋り、うんざりした教師は正解に書き換えた。

「二十年近く前、東京で名を馳せたストリッパーがいた。それがダンス留学戻りの、旧姓、藤本サツキ。これがこいつの母親だ。」

アメリカから東京に突如やって来てショーダンスを始め、あっという間に有名になったらしい。親父からも、見た目も良かったが、ダンサーとしての能力が群を抜いていた、と聞いている。」

「うーん。なんだか、分かる気がする…。」

良二が成田冴をチラッと見て、妙に納得した。

「因みに、絶頂期の藤本サツキの写真を見たが、こいつの髪を短くして濃い目に化粧すると瓜二つ、と言う感じだった。…そして、藤本サツキは3年目のある日、突然、その世界から消えた。」

「謎の引退！」

「…と、言う事になっているが、理由は藤本サツキの妊娠だ。」

「じゃあ、その時の子供が冴？」

「ピンポン！」

「藤本サツキはストリッパーを辞め、成田サツキになった。こいつの父親は刑事を辞め、探偵を継いだ。」

「私が幼稚園位の時は、二人とも、裏世界知ってるから、すごい仕事っぷりだったんだって。でも、別れちゃったの。」

「ええ！？なんだか意外だな。」

「お母は死んじゃう一年位前に、私と家出たの。お父にもっと頼って欲しいって、言ってた。」

「そんな理由で？冴のお父さんは、なんで頼らなかったの？」

「いいか、良二、想像してみろ。こいつから不可解な言動と現象を取って、その分それ以外の精神や肉体を強化したのが、成田サツキだぞ？」

「お父と結婚したのは、初めて喧嘩で負けたからなんだって。」

「好きなタイプは？と聞かれて、自分より強い奴、と真っ先に答える様な女だぞ？もし今、成田サツキがお前なんか見たら、とりあえず、投げ飛ばされる。」

「うっ…。俺もそんな気がする。」

「ははは。お母ならやるね。」

「冴？笑い事じゃあ…。」

「そんな女に、はいそうですかと頼れると思うか？こいつの父親は叩き上げの刑事だったんだぞ？まして、最初惚れた理由が喧嘩に負けたから、なんて言われてみろ。弱さも隙もみせられなかったんだと、俺は思う。」

「言われてみると、それは、キツイかもな。」

「お母が死んじゃって、お父は後悔してるよ。つまらん意地を張るんじゃなかったって。でも、お母も離婚を言い出さなかったのは、戻るつもりだったからだと、私は思う。…えへへ～。ふーたんの真似っこ。似てた？」

「似ているわけがないだろう。」

「…ごめんなさい…。」

「いやいや、結構似てたよ。」

「やっぱり～？」

「調子に乗るな。」

「お母さんが亡くなったのは、なんで？」

「ははは。それもある意味、伝説だよ。成田家の。ふーたん、どうぞ。」

「ある日、成田サツキは生活費に困ったわけでもなく、専業主婦がつまらないと言う理由でパートに出る事にした。その初日、死ぬほどつまらなくて頭痛がしてきたと言って帰ってきた。家に着いて飯の支度を始めたところで倒れ、こいつが救急車を呼んだが、病院に着いて三十分も経たないうちに他界した。脳卒中だったんだ。」

「すごいよね。死ぬほどつまなくて、ほんとに死んじゃったんだよ？お母は最期までレジェンドメイカーだったんだよ～。」

「本当に、すごい、としか言いようがないな…。確かにそのDNAは冴に受け継がれてるけど、冴は、つまらないからって…死んだらダメだぞ？」

「良君…。うん！冴死なない！不死身！」

「おーい！それ、ちょっと違うぞー。」

「いや、こいつはきっと不死身だ。」

同じ人間と考えるより、未知の生物と認識した方が、遥かに納得しやすい。

「見て見て！もうちょっとで着くよ！」

成田冴は完全に島に付く前に、ボートを飛び降りた。水位は膝までしかない。遠浅のようだ。成田冴が興奮のあまり走って行ってしまったので、俺達も後を追って走った。

「よーし！探検だ！」

成田冴に付いて島を一周した。島は、想像以上に小さかった。俺があまり疲れていない事を考慮すると、正確な数字は分からないが、校庭一つ分程度だろう。砂浜は十平方メートル程しかなく、後は切り立った巨大な岩とその周辺の岩場、雑木林で構成されていた。無論、人はいない。

「謎の無人島だね！」

「おかしな事を…。住んでメリットの無い所に、人が居る訳がないだろう。」

「いやあ、全然怖くないじゃないかあ。俺って心配性…。」

「人以外はいるかも知れんがな。」

「ハセ！やめろって！…おい、冴！？何やってるんだ！？」

見ると、服を脱いで投げ、を繰り返している。

「じゃーん！水着！着てきたー！良君の下履いてるのも水着でしょ？」

「冴、幾ら中に着てるからって、そういうことは見えないところで…。」

「なんで？人居ないよ？」

「そうだけど…。」

と言って俺を横目で見ると。独占欲の表れか。

「良二。高々、布二、三枚の事だ。」

「いや、そういう事じゃ…。あれ？そういう事…か…？」

「そーゆーこと！良君！早く泳ごうよ！」

良二はTシャツを脱いで成田冴の手を取った。

「ハセ、海パンもう一つ俺のカバンに入ってるよ？」

「良君！それ言ったらダメ！」

成田冴が悲痛な顔で叫んだ。

「えっ？俺、なんか変なこと言った…？」

「言ってる。気にせず行ってこい。」

「ふーたん、カナヅチ…。」

「うるさい！早く行け！」

「お前、泳げないのか！？」

「アルキメデスの原理から考えても、人間は浮くようには出来ていないんだ！」

「泳げないのかあ。いやあ、天才にも出来ないこともあるんだなあ。」

「なんだ！？その程度で鬼の首でも取ったような顔をするな！浮力計算も満足にできない奴が…」

「気にするなって。人には向き不向きがあるんだし。」

奇妙な含み笑いで、俺の肩をぽんと叩いた。

「…。」

俺は初めて本気で良二を睨んだ。

良二は一頻り、水を得た魚になった成田冨に転ばされたり、海パンをずらされたりして、疲れきった様子で浜に戻ってきた。息が切れて言葉も出ないらしい。調子に乗るからだ。所詮、成田冨には敵わない。俺の横でグタッと大の字になっている。成田冨の気は無くならない様だ。暫くして、一人がつまらなくなったのか、良二を追って、スキップしながら戻ってきた。

「お弁当食べようよ！」

「ああ。そろそろ昼だな。」

「良君、大丈夫？」

良二は無言で頷くと、やっとの様子で起き上がった。成田冨は、やたら大きな鞆の中から、四段重ねの重箱を出し、どすんと置いた。

「一体、これは何人分だ。」

「四人分位！私二人分だから！今度はちゃんと計算したよ。」

更に、2リットルボトルの水三本を取り出した。こいつは大は小を兼ねる、と言う神話的慣用句を未だに信仰しているに違いない。

「う？…ああ！」

「どうした、良二。食えない程に疲れたのか？」

「いや！ない！」

「お弁当、これじゃ足りなかった？」

「違うよ！スワンが！ボートが…ない！」

「へ…？」

…確かに、見当たらない。見渡す限り海だった。あの不自然な白鳥型のボートはどこにも見えない。

「…最後に降りる時、固定、しなかったの…？」

流石の成田冨も、言葉に勢いが無くなっている。

「ハセ…？」

「…。碇は付いていなかった。」

「当たり前だろ！」

「大体、あんなもの、どうやって固定しろと言うんだ。」

「ハセ…、んああ！もう…！馬鹿！」

「あ、キレた…。」

成田冨が呟く。

「お前は！頭いいんだか悪いんだか！」

「俺はサバイバルには精通していない。」

「そんなの考えりや分かるだろうが！」

「現代には携帯が…」

「ふーたん…、電波、届いてないよ。」

「ハセ！大体お前、泳げないクセにどうやって帰るつもりなんだ！」

「うるさい！無い物は騒いでも変わらん！」

「誰のせいだと思ってるんだよ！」

「まあまあ、お二人さん、ここは一つ、おにぎりでも…。」

と言って、成田冨が無理矢理おにぎりを持たせた。

「とりあえず、今のトコ、食料あるし、まあその内誰かの身内が心配するか、通りかかった漁師さんが不信に思うかして、助かって！」

成田冨には笑顔が戻っている。

「いやあ、こんな近所で遭難するなんて、オツだね！」

…そうか。こいつにとっては『遭難』もイベントの一つと言う事か。

「…そうだよな。誰か心配する筈だよな。」

「あ！私ん家はダメだ。仕事柄、個別主義だから、心配するのに一週間はかかるなあ。」

「その点、ハセン家は金持ちだから、誘拐とか、警戒してるだろうし…。なんだ、絶対助けが来るよな。いやあ、俺ってホント心配性…」

「…水を差す様で悪いんだが、俺は家出中だ。」

「っ！しまった！うかつだった…。」

良二が再び蒼白になる。

「ふーたん！ダメじゃん！余計な事言っちゃ！」

「事実は知っておいた方がいいと思うが…。」

「良君はまだ、こういうの慣れてないんだから！」

「慣れているのはお前だけだろう。それにな、良二、お前自分の家を忘れていないか？」

「ああ！そうだった！よし！大丈夫だ。大丈夫…。」

必死で言い聞かせている。余りにも可哀想なので、と言うか、責任の一端は弱冠俺にもあるので、安心できそうな事を言うてやることにした。

「成田冴、お前は助かると思うんだろう？」

「うん。なんとなく。」

「じゃあ、大丈夫だぞ。良二。こいつの根拠のない勘は当たる。」

「…ほ、ほんとに…？」

「本当だ。」

「そうそう。…でも、なんか…。」

「何！？」

何だ？成田冴が、何か引っ掛かる様な言い方をする事は、稀だ。

「…んーん！何でもない！助かるよ！普通に！なんとなく！最終的にヤバくなったら、私が泳いでって、助け呼ぶから！」

「そ…っか。うん！助かるよな！俺は冴を信じる！」

明る過ぎるほど明るい言い方に、良二はやっと、希望を得たようだ。

「まあ、今日はプライベートビーチに来たと思えばいいじゃん！」

「そうだよな！」

「さあ、ゴハン、ゴハン！」

二人が食事を再開したので、俺もそうする事にした。起きていない事を考えても仕方がない。それに、どうせ成田冴が気に掛かる事など、精々消失したスワンボートの行き先位の事だろう。

飯を食って、日が落ちる頃になっても、水平線には何も現れなかった。まあ、二十四時間くらい経過しなければ、良二の両親も通報しないだろうことは予測済みだ。俺は成田冴に『偶然バッグに入っていた』双眼鏡を渡され、海を監視している。成田冴は乾いた流木等を拾って来て、火を熾し始めた。良二は大人しく指示に従って、下から息を吹いて手伝っている。

「…お前、煙草を吸うわけでもないのに、何故、ライターを持っているんだ？」

「これ？花火用だよ。」

良二の息が止まった。

「良君、止めたら火が…」

「それだよ！花火で助けを呼ぶんだよ！こんなところから花火が上がれば、絶対変に思って誰か来る！冴！早く花火！」

「…ごめん。あるんだけど、これなの…。」

必要以上に大きな鞆から出てきたのは、線香花火だった。

「いやあ、この時期花火の売れ行きいいらしくってさあ。これしか残ってなかったんだよね。」

「…。いいんだ。舞い上がった俺が馬鹿だったんだ…。」

焚き火をする前に燃え尽きたようだ。

のろしの効果も期待できる、という成田冴の説得により、良二は復活し焚き火は完成したが、依然、船舶の気配はなく、成田冴がどこからともなく捕獲してきた魚数匹を焼いて食った。暇なので、成田冴に探偵業で小耳に挟んだ怪談を話させて、良二を怖がらせようとしたが、例の明るい口調と、詳細を省いた話だったために、^{ことごと}悉く失敗した。が、やはり少しは怖いらしく、だんだん俺に寄り添ってくる。暑苦しいので、俺もサイトで見つけた話をする事にした。

「とある女性の話だが、彼女は大学に進学が決まり、一人暮らしをしようと思った。バイトも決まったので生活の目処もたつ。それならば、ということで両親も納得し彼女を送り出した。しかし、初めての一人暮らしは、学校とバイトと慣れない家事で忙しく、最初の数ヶ月は疲れきっていて細かい事には気が付かなかったんだな。半年ほど経って、余裕が出てきた頃、彼女は夜中、部屋のドアの向こうで物音がしている事に気が付いた…。」

「も、物音…。」

「そうだ。何かを探って引っ掻く様な音だ。それは、毎月決まった時期に聞える。それが数ヶ月続いた。その間彼女は怯えながら過ごしていたが、ある日、思い切ってドアを開ける事にした。」

「なんで開けるんだよ…。引っ越せばいいのに…。」

良二が我が事のように、眉を寄せた。

「彼女には、引越しの資金が無かった。実家に戻って一度味わった自由を手放すのも嫌だった。考えた末、その日は寝たふりをして、音が聞え始めるのを待った。案の定、夜中の三時を回る頃、例の音が聞え始めた。」

良二は身を庇うように体育座りをしながらも真剣に聞いている。

「彼女はそっとドアに近付き、音を立てないように鍵を開け、一気にドアを押し開けた！何かかぶつかり、転がった。そこには…」

「そこには！？」

「…バイト先の店長が封筒を片手に尻餅をついていた。」

「は？」

「その封筒は電気と水道局からの請求書だった。」

「え？」

「彼女は、初めての一人暮らしだったために、自分が電気代などの支払いをしていない事に気が付いていなかったんだな。彼女を好いていた店長が、毎月彼女の電気代などを代わりに支払っていたのだ。良心的だが彼女はストーキングされていたわけだ。因みに他人の郵送物を勝手に開封するのは憲法第十三条…」

「ハセ、それ、怪談じゃないじゃん。」

「何を言う。生きて人間の方が余程怖いに決まっている。」

「そりゃそうだけど…。」

「怪談の方がいいなら…」

「いや！いいよ！なあ、冴…あれ？…」

成田冴は寝ていた。この様子だと最初のレム睡眠前の深い眠りの真っ只中だろう。

「冴って、寝るのも早いよな。」

「まあ、時間も一時を回っているからな。」

「もう、そんな時間だったんだ。でも、無理ないか、火熾したり、魚取ったりで疲れたんだろうな。本当にすごいサバイバル能力…。普段のおかしな行動からは想像できないような、できるような…。」

「全くだ。映画で言うなら、真っ先に自滅していそうで、エンドロール直前にひょっこり現れるタイプだ。」

「はは…。その感じで行くと、俺は中盤のドサクサに紛れて観客に忘れられるタイプなんだろうな。…俺って一体…。」

「俺達も寝るか。」

「そうだな。」

「火を消しておいた方がいい。雑木林に引火して火事になったら…」

「そうだ！全部燃やせば誰か気付いてくれるかも！」

「…お前は時々恐ろしい事を言うな…。気付いて救助が来ても、大出火の原因を追究される事は必至だ。」

「…それは…不可抗力って事に…。」

「馬鹿か。どちらにしろ厳重注意を受けその後…、まあそれはいい。しかし、もしもその火事でさえも気付かれなかった場合、その後は火を熾す木も何もなくなり、生存確率は下がる一方だ。」

「す、すいませんでした。」

俺達は交互に海水を運んで火を消した。火が消えた直後はかなり暗く感じる。横になると、すぐに睡魔に襲われた。うとうとした頃、良二が起き上がり、屈んで成田冴を見ていのが見えた。

「冴の寝顔は、かわいいな…。」

等と眩きながら、不用意に成田冴の顔に手を伸ばそうとする。

「やめろ！良二！」

良二がびくっとなって、手を引っ込めた。

「おい、脅かすな…」

「触ったら、駄目だ。」

全く。こいつはいつも、俺が寝ようとするのを阻む。

「なんだよ、ハセ、もしかしてヤキモチ…」

「死にたいのか？」

「は？」

「死にたいのか、と聞いている。」

「いや、死にたくないけど…。」

「いいか、ちょっと離れろ。俺の横に來い。」

成田冴から1メートルと少し離れたところにしゃがむ。

「見るがいい。」

俺は落ちていた小枝を拾って、成田冴に向かって投げた。

「ハセ！何す…」

“シュパンツ、パキッ”

成田冴が寝返りと共に、チョップで飛んできた小枝諸共、砂地に叩き付けた。小枝は二つに折れている。

「ひいつ…！」

「分かったか？」

「…寝てるのに…。シュツて言った、シュツて…空気、切れたよ、今…。」

「落ち着け。今俺達がいる距離なら、この寝相の被害に合わずに寝ることが出来る。」

「寝相！？これが寝相！？」

「ああ。起き上がったりはしないから、夢遊病ではない。俺は、これもサバイバル能力の一つだと考えている。よし、寝るか。」

「う、うん…。」

良二が大人しく横になった。が、今度は俺が眠れない。苛付く。と、言うことで今回も良二を起こせば、俺が眠れる、と言う結論に至った。

「寝込みは襲わない方がお前のためぞ。」

「ふあ…。うん…。さっきので、分かった…。」

眠そうな声だ。起こし甲斐がある。

「…跳ね返されずに無傷で触れる方法が一つだけある。」

「何々？なんだよ？」

「自分で探せ。おやすみ。」

「なんだよ！意地が悪いなあ。…ってちょっと待て。なんでお前がそんな事知ってるんだよ！」

「…。」

「寝ちゃったのか？…またかよ～。また、寝られない…。」

悪いな、良二。俺の睡眠のためだ。心で詫びると、再び睡魔が襲ってきた。

ふと目が覚めた。時計を見ると午前三時になるところだった。大きな岩の向こうに不信な影が見える。双眼鏡で見ると、それは中型の船舶だった。あやしい。救助に来たとはとても考えられない。なぜなら、出てきた男は周りを気にしながら、雑木林に入っていったからだ。どうすべきか迷ったが、とりあえず、静かに二人を起こし、事情を説明した。

「でも、やっぱ、あれに乗らないとすぐには帰れないし…」

「そうだね！じゃ、近付いてみようよ。」

と言いつつ終わる前に成田冴は蓋全開のままの鞆を持って、するすると船舶に近付いていく。

「これ！プーさんのじゃん！」

「大声出すな。」

「ごめん。だって、あんなに行くの嫌がってたのに…」

「悪い兆候だな。自分以外を近付けたくない何かを隠しているとしたら思えん。しかも、それを取りに来た感じだ。」

俺達が制する前に、成田冴は船舶の中に入ってしまった。仕方がないので、俺達も後を追う。

「汚いけど、ここで暮らしてるみたいだね。」

中には、レンジ、ベッド、冷蔵庫等が散在し、奥はトイレのようだったが、この有様なら、トイレも相当なものになっていそうなので、開けるのはやめた。

“ドサツ…ギツ、ギツ…”

船が動き出した。男が戻ってきたのだ。これは…、まずい。隠れている暇は無さそうだ。全員が総判断したらしい。息をつめて、男が現れるのを待った。

“ガチャ、バタン”

ドアが閉まった。後三段下りれば俺達が見える。

“ギツ”

一段目。足が見えた。

“ギツ”

二段目、ベルトが見えた。しかもそこには…

“ギツ”

銃が刺さっている。

「うわっ！な、なんだ！お前等…」

“ドスッ、バサバサ…”

男が担いでいたスーツケースが落ち、中から袋詰め白い粉が散る。麻薬だ。成田冴を見て俺は叫んだ。

「花火！レンジ！」

成田冴の動きは早かった。全ての線香花火を近くにあった電子レンジに放り込み、スタートボタンを押す直前で体を止めた。俺と良二はベッドの影に隠れた。男は出遅れたものの、銃をこちらに向けている。

「中に花火！押したら爆発！岸まで連れてって！」

成田冴が低く鋭い声で言いながら、レンジを銃で壊されないように体を盾にした。

「なんで、なんでこんなところにいるんだ！俺はコレを運ばないと、殺される！お前等みんな…」

男が銃を構え直す。

「よせ。誰か一人でも危害が及べば爆発させる。花火と言えどこの量の火薬なら一発で船底に亀裂が入る、そうしたら、どうなると思う？」

とんだはったりだった。火薬の量も、レンジの力も全く分からない。爆発するかも分からない。もし、本当に爆発したとしても、規模が全く計算できていなかったのだ。

「し、沈む…」

「そうだ。全員、このブツと一緒に海に消える。もしお前が助かって、消えたブツはどう説明する。」

「船が爆破されて、沈んだって…」

「それで許してもらえらるなら、どうして怯えるんだ？」

この男、根っからの悪者ではない。しかも、頭も良くはないようだ。もしそうならば、すでに誰かが…いや、全員死んでいることだろう。こういう奴には考える隙を与えず、こちらの要求と次の行動を押し付けるのが、得策だ。

「…うう。終わりだ。俺は、終わりだ…」

「終わりじゃない。取引だ。俺達を無事に岸まで連れて行けば、無かった事にしよう。お互いにだ。」

「うう…」

「悪い話じゃないはずだ。そうだろう？」

「あ、ああ…。」

よし。

「じゃあ、舵取りの間銃は持っていていい。俺達はここにいるが、誰かが裏切らない限り、この船は安全だ。」

「…わ、わかった。はっ…ブ、ブツには…」

「大丈夫だ。触らない。俺達はただ、岸に着きたいだけだ。」

「じゃあ、舵を…」

「ああ、頼んだ。」

男は、甲板に戻った。少しだけ緊張が解ける。この船なら十数分程度で岸に着くだろう。しかし、油断は出来ない。今出来る善後策は一つ。

「あと少しで携帯が繋がるはずだ。」

圏外から脱出してすぐ、送信できるように救助を求めるメールを打った。

「気は進まんが、この状況を最速で理解し、手を回せる人間が一人だけ…」

「ふーたんの父上だ！早くやって。私の勤ではかなりやばいことが待ってる。」

「ええ！？これ以上ヤバイ事って…」

三分経過した時点で、電波の状態が良くなった。すかさずメールを送るが、岸までの時間は短い。散らした麻薬の袋詰め目をつけた。良二と俺で、散らした具合をなんとなく広げ、逃げ道の確認をした。無いと思うが、岸に着くまでに奴の気が変わったら、強行突破するしかない。そうなった場合、泳げない俺が囿になった方が、二人の生存確率は上がる。レンジのボタンを寸止めしたまま、微動だにしない成田冴に近付いた。

「…俺が変わ…」

「ダメ。」

目を合わせようとしなない。

「生存率が…」

「イヤ。」

まただ。また苛付いてきて、声を荒げた。

「遊びじゃないんだぞ！」

「だから、イヤ！私なら出来る。私なら、二人が逃げた後にボタン押して、どうかなる前に逃げられる！」

「無茶言うな！もし爆発しても、起爆までの時間も爆発の規模も計算できてないんだ！」

「え！？そうなのか！？」

蒼白になった良二が聞いた。

「そうだ。花火の火薬量も成分もレンジの威力も分からない。だから…。だから、もしも奴の気が変わったら、泳げない俺が囿になった方がいいんだ。成田冴、俺と変われ。」

成田冴は動かない。考え込んだ良二も、俺と同じ結論に至った様だ。

「冴…、ハセはみんなの事を考えて…」

「分かっているの。計算できてないのも全部。私もみんなの事考えてる。みんなで助かるには、私がレンジのがいいの。」

「花火の指示をしたのは俺だ。責任があるんだ。」

「責任なんかいらん！私を信じて！」

「納得できん。」

「…いい？ふーたん。レンジでお皿の縁とかの金属がスパークするまで五秒くらい。それから考えて、花火に入ってる金属がスパークして火薬に火がついても、線香花火なら多分炎上するくらい。それで多分レンジは止まっちゃう。最悪のパターンで行くと、それから火災になってエンジンとかに引火して最終的に爆発するかもしれない。でもそれまでには、確実に外に出られる。ふーたんだって、あの悪いプーさんが途中で裏切るとは思っていないでしょ？」

「…まあ、確かに。」

「それなら、さっきと同じ姿勢で居た方が、プーさんも安心するはず。女の私が一番強いだなんて思っていないだろうから、油断してるのは絶対。ここまでのいい？」

「理解は出来た。」

「岸に着いたら、ふーたと良君が先に出て。」

「おい！冴はどうするんだよ！置いていけない！」

「大丈夫だよ。良君。その次にプーさんを出させる。最後に私。これでうまく行く。」

「…それは、お前の勤か？」

「うん。信じて欲しいの。」

やっと合わせてくれた成田冴の瞳には、懇願と頑固さが混在していた。初めて見る顔。俺が気付かなかった、知らなかった成田冴がそこにいた。

「…わかった。」

大きい揺れの後、船が止まった。岸に着いたようだ。あの男が姿を現す。

「着いたぞ。まず、散ばったブツを鞆に仕舞え。」

俺と良二がそれをやることにした。成田冴とその男が睨み合いになっている。

「まず、そっちの二人を逃がして。」

「あんたはどうするんだ？」

「そっちが最後まで裏切らないか確認してから出る。背中を撃たれるのはイヤ。だから二人が逃げたら、そっちもさっさと要る物持って出てって。」

沈黙が続いた。頭が悪いなりに考えているのだろう。

「…よし。わかった。おい！お前ら降りろ。」

俺達は言われるがまま、船を降りた。そこは相変わらず呑気で田舎めいた風が流れていた。…親父、間に合わなかったか…。振り返り、あの男が出てくるのを待つ。思ったより早く奴は出てきた。奴が船と俺達の丁度等間隔に来た時だった。

“ファンファンファン…”

パトカーのサイレンだった。その数、十数台。あっという間に取り囲まれる。奴は怯んだが、事態を飲み込むのは早かった。

「…裏切りやがって！」

突進してきて、良二を突き飛ばし、俺を人質に取った。銃がこめかみに押し付けられる。

「くそう…なんで…なんで！」

「今更、罪状を増やすな。完全な現行犯だ。取るべき最善策は、大人しく投降することだぞ。」

「もうお前の話には乗らねえ！」

駄目だ。話が通じなくなっている。でもこれで、確実に良二と成田冴は助かる。そういえばあいつは、まだ、出てきていない。全身が恐怖するのが分かった。その時、

“バシッ、ポッ、パンッ”

弾ける様な鈍い音と、赤い光が辺りを覆った。船が燃えている。

「ああ…！おれの、おれの、ふね…」

振り返って脱力しかけた男に、何かがすごい勢いでぶつかって来た。反動で俺は1メートルほど転がり、良二が俺を受け止める。その飛来物は成田冴だった。揉み合いながら転がる二人に、警官達が駆け寄った。口々に何か言っているが、もう俺の耳には届かない。目の前の乱闘に手も足も、立ち上がることもできない。

“パンッ…”

カンシャク玉でも踏んだような、軽い音だった。

「…冴！」

一瞬、人込みが急に割れて、銃を持った男と成田冴が対峙しているのが見えた。即座に男は身柄を拘束される。成田冴は数歩後退りして、こちらに振り返る途中で崩折れた。良二が走る。頭が地面に落下する直前に、受け止めた。

「冴！しっかりしろ！誰か！救急車！」

「容疑者確保！救急班はまだか！？負傷者1名！」

「冴！冴！気を失うな！」

怒号が飛び交う。成田冴の二の腕から血が溢れている。鼓動に合わせるような溢れ方だった。良二が着ていたTシャツを脱いで、引き裂く。それを成田冴の脇から肩に回して、きつく縛った。

「冴！寝るな！何か喋れ！」

「…意外と…痛い…。」

「ああ。でも、こんなの大したことない！大丈夫だ！そうだろ？」

「うん…。経験値…上が…った…。」

「病院着いたらレベル上がるぞ！それまで寝ちゃダメだ！」

「了…解…。」

サイレンが近付いてきた。

「救急班到着！道開けろ！」

親父の声がした。来ていたのか。ストレッチャーが成田冴を乗せて救急車に向かう。良二はずっと話しかけている。親父が俺を引き摺って、一緒に救急車に乗り込んだ。

「私は弁護士長の長谷川です。身内同然なので同行します。」

「分かりました。出血が多い。休まず話しかけてください。」

バイタルを確認しながら、救急隊員が言った。サイレンと共に走り出す。

「冴ちゃん？私分かるね？」

「…ふーたんの…父上…。」

「そうだよ。成田も、お父さんもできるだけ早く来ると言った。」

「お父…が…？」

「ああ。」

「…お父…と、会う…。久し、ぶり…」

「まだ、彼氏、紹介してないんだろ？」

「うん…。」

「紹介してくれよ、ちゃんと。」

良二が力いっぱい、成田冴の無傷の左手を握る。

「…うん。…寒い…。」

「冴！目閉じるな！」

「まだ着かないんですか！？」

「もうすぐです！頑張ってください！」

救急車は猛スピードで駆け抜けている。

「冴ちゃん！しっかりしろ！」

閉じかけた目で、俺に視線を移した。

「…ふー、たん…。泣いちゃ…ダメ、だよ…」

成田冴の体から力が抜けるのが分かった。

「…おい。おい！冴！起きろ！」

「着きました！」

救急車のドアが勢い良く開いて、医者達が駆け寄ってきた。ストレッチャーが走る。手術室までの最短距離を駆け抜ける。成田冴だけが、手術室の向こうに消えた。良二も親父も、何も言わず、暫く手術室の扉を見ていた。

「風馬！」

振り向きざまに、親父が俺を殴った。俺は…何も、感じない…。

「お前が付いていながら…」

…そう。俺は、何一つ、出来なかった。それどころか、一番大切なものさえ、自覚していなかった。

「あいつを…。あいつを助けてくれ！頼む…」

膝を付いて、泣き崩れる。今やっと、全てが解った——

俺の号泣と混乱が収まるまでの間に、良二がこの二日間の出来事を、事細かに親父に報告してくれていた。こんなに泣いたことなどなかった。泣き過ぎると、その後はただ脱力するだけで、考えが纏まらない。

「よろしいですか？」

医師が親父に話しかけた。

「どうでしたか？」

「大丈夫ですよ。詳細を説明しますので…。」

「あ、俺が行きます。おじさんはハセ…風馬と話してください。」

「…すまないね。じゃあ、任せるよ。」

「はい。」

良二は医師と共に奥へ行った。失くす寸前に気付いた大切なものを、失くさずに済んだ安堵感で、思考が戻ってきた。親父が俺の隣に無言で座った。

「…大丈夫か？」

「ああ。もう、落ち着いた。」

「風馬、心配したぞ。私は別に同じ道を歩けと言ったわけじゃないんだ。知っての通り、私は成田を弁護士としてもサポートしてきた。昔おまえが冴ちゃんを守る、と言っていたから、選択肢として進めただけだ。冴ちゃんが成田の跡を継ぐなら、そういうサポートの仕方もあるぞ、と言いたかっただけなんだよ。」

「そうだったのか…。」

「お前が言うように、人それぞれだ。守り方も道もな。それを決め付ける権利は、私にはない。」

「それじゃ…。」

今回、あいつの様子に突っ走ったのは、俺だったのか。遭難したのは、俺の人生の方だったのかも知れない。

「とりあえず家に戻って来い。私は決していい父親じゃない。だが、お前の思う道に辿り着くまでに、必要な事をさせてやるのが、私にできるせめてもの子育てだ。」

思っていたより、ずっと、親父は父親だったのだ。それを知って知らずか…否、あいつは気付いていたのだろう。これでは、本当にただの反抗期じゃないか。何も知らない馬鹿は、俺自身だった。まだ俺には学ぶべきことが沢山あるようだ。

「…大学は行く。どこで何を選ぶかはまだ決めてない。」

「そうか。それでいい。お前なら、どこでも何とかなる。…おっと。」

懐から携帯を出し、確認して、渋い顔をした。

「すまないが、仕事だ。また話してくれるか？」

「ああ。いつでも。」

見送ってから気が付いた。親父は大人数を助けるために、色々なことをやってきたのだ。俺も、たった一人でいいから人を守れるようになりたい。人を守ったり助けたりするには、人の中で『人』という不確定要素の多さと、傾向を知る必要がある。さっきまでの俺は、一人で何もかも出来るつもりで、生きていただけだった。失うものなどない、と独立することで孤独を意識することを避けていただけだ。本当に孤独なら、あいつを失う恐怖に泣いたりもしない。初めて出会った時から、あいつはずっと俺の孤独を包み隠して、弱い部分に気付かせないようにしてくれていたのだ。だからこそ、俺は自分の事だけを意識してこられた。当たり前になりすぎて、その事に無自覚だった。最近の苛付きも、離れていくかも知れない不安が原因だった。あいつが守ろうとするものが、俺から良二に変わる事が、不安で堪らなかったのだ。

「ハセ…。」

「あいつは…？」

「全然大丈夫だって。弾も抜けてたし、撃たれた衝撃で動脈に亀裂が入って、出血が多かったんだけど、俺がとっさにやった応急処置が良かったみたい。で、輸血して縫合も完璧にしたから命に別状はないって。」

「…そうか…。」

「今、三階の個室で寝てるよ。」

「そうか。」

「お前こそ、大丈夫か？…あんなお前、初めて見た。」

「…ああ。」

良二が確かめるように、俺を見た。

「…ハセ、聞いていいか？」

「何だ。」

「お前、やっぱり、冴の事好きだったんだな。」

「答えていいのか？」

「聞かなくても分かるけど、一応、な。」

「…。多分、そうだ。」

「なのに何で、俺と冴が付き合うの、黙って見てたんだ？」

「多分、どこかで気付いていた。俺じゃ、あいつを守りきれない、と。それに…」

「それに？」

「俺の、あいつを思う気持ちは…。女というより、母親だったと思う。ずっと守られていたのは、俺の方だった。」

「母親、か。」

「ああ。…だった、だ。」

「じゃ、俺は新しい父親か。」

「それは認めない。」

良二が笑い出し、俺もつられて笑った。

「良二。」

「ん？」

「お前は、俺の親友だ。」

「…。そんなの当たり前だろ。今更、何言ってんだよ。」

「言ってみたかっただけだ。」

「でも、ハセに言われると、重みが違うなあ。」

照れつつも、嬉しそうに笑っている。油断している時のこいつの顔は本当に間抜けだ。あいつを的確に応急処置した男とは思えない。こういう顔を見ると…

「だから、親友のお前のものは、俺のものでもある。」

「おう。何でも言えよ。どんと来…ん？おい、それって…。」

「油断するな。」

「それ、冴の事も入ってるのか！？」

良二に背を向けて、あいつの病室へ歩き出す。

「おい！ハセ！待て！」

後ろで慌てる姿が目につかぶようだ。どうやら俺の、嫉妬と言う名の反抗期は、当分終らないらしい。

病室では看護師が待機していた。緊急入院のための、日用品が要るのだと言う事を伝え、さっさと病室を出て行った。麻酔はまだ暫く効いているらしい。

「俺が冴ン家行って、取ってくる。冴の父さんは今出張で、すぐ戻れないみたいだから。」

「そうか。じゃあ、俺がコイツと残るんでいいんだな？」

「信用してるよ。…。うーん、ダッシュで戻ってくる。」

「ふん。信用しきれてないじゃないか。」

「…だけど、お前になら、もし冴を取られたとしても、許せるよ。けど俺、そうならない自信、かなりあるから。」

にやりとして、病室を飛び出して行った。なんと生意気な。親友が病院を出るのを窓から見送って振り返ると、成田冴が寝息を立てている。昨晚と違って動かない。どうやらこいつを大人くさせるには麻酔が要るようだ。近付いて、自分の人差し指をそっと、この寝相最悪女の手の中に置く。

「…ん…お母…。」

寝言を言って、俺の指を掴んだ。

「…サエ…レベル、上がっ…」

麻酔無しの時、寝ているコイツに触れられるのは、この方法だけだ。親友もそのうち気付くかもしれないが、俺からは、教えてやらない。絶対に。俺がコイツを守れる側の人間になるまでは。

カウンセラーや占い師は、誰にでも当てはまりそうな事をしたり顔で言うものだ、と後からハセが言っていた。誰かに憧れたりするのは悪い事じゃない。でも、誰かになろうとするのはちょっとピントがズレてるって事なんだと思う。そこに在ることが、そのものの全てなんだ。

夏休みの序盤に、冴が撃たれる大事件が起きた。その日仕事のせいで遅れて来た、冴の親父さんは、病院に着いて麻酔で寝ている自分の娘と、俺とハセを見るなり、俺の肩を掴んでこう言った。

「君！君は大丈夫だったのか！？」

勿論俺は、掠り傷一つ負ってなかったので、

「だ、大丈夫です。それより、冴…」

「この子は大丈夫！それより、君の様な普通の子が…。さぞや怖い思いをしたらろう。本当にすまないねえ…。一体誰に似たんだか…。」

と、我が娘の愚考と奇行に号泣しつつ、俺に詫びた。俺は俺で、特に悪いことをしたわけでもないのに、冴の親父さんに殴られるんじゃないかとびくびくしていたので、気が抜けてしまった。お陰で、嘔んだり、言い間違えたりする事もなく、一件の概要を説明することができた。途中、

「ところで、君の名前は？」

と聞かれ、

「あ！すみません。…初めまして、村井良二です。」

と答えると、

「…ん？ああ！君が彼氏か！これはこれは、父の^{なりた えいじ}成田榮治です。」

と、笑顔で握手を求められた。…が、

「いやあ、この度は…。…この度も！本当に申し訳ない…！」

と、また泣き出してしまった。どうやら親父さんは相当涙もろい人らしい。っていうか、喜怒哀楽のテンションの高さと移り変わりの速さは、正に、この親にしてこの子あり。冴が目覚ますまで、親父さんと俺とハセの三人で話している内に、すっかり仲良くなってしまった。

そして、冴が目覚めるなり言った言葉。

「プーさんが！サエ、ハンティング！」

と、この世で最も自分の事を心配しているだろう三人を啞然とさせた。事情を知らない人が聞いたら、間違いなく、CTスキャンをかけさせるだろう。

「こら！冴！お前は本当に…」

「お父ー！久しぶり！元気？私元気！」

元気、じゃないだろう…。少なくとも、撃たれたところは…。という沈黙の突っ込みにもめげず、冴はお腹空いたなどと言い出した。問題無さそうな冴を見た親父さんは、俺達に後を頼んで仕事に戻った

翌日の新聞の一面に事件の事が載っていた。その数日後から、担任やら冴の所属する演劇部の顧問やら部員やらが、代わる代わるお見舞いに来た。

冴が大人しく寝ていたのは十日間だけだった。それでも俺は、冴にしてはよく耐えた方だと思う。抜糸の翌日、病室のドアを開けた俺とハセは、ベッドに冴の姿がなかったので、一瞬焦ったが、良く見ると、ベッドの向こう側で片手腕立てをやっていた。ハセが叱り飛ばし、俺はなだめて冴をベッドに戻す。冴はその流れが面白かったのか、その後数日は、冴が何かやり始め、俺達が阻止する、を繰り返した。その後、脱走を二回。脱走未遂を五回やった。実はその頃には、脅威の回復力でもう殆ど治っていたのだが、そんな事が冴に知れたら、派手に踊りだしたり、ストリートファイトでもしに行つて、また何か起こしそうなので、俺が、せめて通常の完治日数まではと、医者に頼んで黙っておいてもらった。

「ハセ、お前、何で毎日居るんだよ？」

俺達は今、ロビーの売店で、冴のお見舞いに来る人に出す飲み物を買っている。昨日冴がメールで、今日見舞いが来るという連絡を受けたのだ。

「お前こそ、毎日居るじゃないか。」

「それは、親父さんに…」

「俺も一緒に頼まれたぞ。」

「…俺は、冴の彼氏で…」

「成田冴は竹馬の友だ。更に、俺とお前も親友だ。全ては繋がっている。何か不信な点があるか？」

「ハセが毎日居るから、俺も毎日居なきゃいけないんだよ！」

「無理して居なくてもいいんだぞ？お前は残り僅かな夏休みを楽しむがいい。成田冴は俺に任せろ。」

「つく～！それが嫌なんだって！第一、遊ぶのも、冴が居ないと意味無いじゃないか…。」

あの一件から、俺達は毎日病院に通い、気付けば夏休みも後一週間で切っていた。通常の完治日数まで入院させるようにしむけたのは俺なので、本当のところ、自業自得なんだけど。

「では何故、毎日居るのが不満なんだ？」

「毎日居るのが不満なんじゃなくて、ハセが居るのが…。そうだ！お前、宿題やる暇ないんじゃないか？帰ってやった方が…」

「宿題だと？馬鹿馬鹿しい。お前は誰に物を言っているんだ。そんなもの、提示された時点で既に終らせてある。」

「え！？マジで！？」

「成田冴も同様だ。お前こそ、帰った方がいいんじゃないのか？」

「うっ…。俺は、帰らないぞ…！」

明日から、宿題やろう…。

「あ！村井君！長谷川君！」

振り返ると、小柄で可憐な感じの、髪短い女の子が立っていた。確かあれは演劇部の有名な美人。でも、名前は良く分からない。

「えーと…」

俺が戸惑っていると、ハセがさくつと答えた。

「演劇部部长、^{すずの ゆり}鈴野友里。確か二組。」

「そうそう。隣のクラス。長谷川君さすが～。」

「お前、よく知ってるな。」

「以前成田事務所で一度出くわした。よく成田冴を呼びにクラスに来ていますが、どうせお前は俺と違って物覚えが悪いから、分からないんだろう。それに、俺とあいつとは長い付き合いだからな。」

と言って、にやりとする。…くっそ～。なんだよ、その『俺は何でも知っている』的な笑いはっ。

「俺だって、顔くらいは分かるよ…。」

ハセは事件以来やけに張り合ってくる。

「で？冴の病室ってどこ？」

「あ、案内するよ。」

買ったジュースを持って、エレベーターに乗り込む。

「あのコ、どーせ相当元気余ってるんでしょ。大変だったでしょう？面倒見のの。」

「いやあ、そんなに大変じゃ…、大変でした…。」

「そうか、良二。やっぱり帰って休んだ方がいいんじゃないか？」

「だから、俺は帰らないって言ってるだろ！？」

「…。ふーん。なるほどねえ。」

横を見ると、鈴野さんが俺達を見ながら、何か納得していた。あれ？そういえば、良く考えてみると、冴は学校では普通に振舞ってたはずなのに、彼女は何で『相当元気で面倒が大変』って分かるんだろう。

「あの、えーっと、何て言ったらいいのか…。どうして、冴が元気とか、大変とか…」

「ああ。クラスじゃ違ったんだろうけど、演劇部じゃあまんまよ。私、演劇暦長いし、演出もやってんの。色んな人見てるし、変人多いから、本性は即効で暴いてやったわ。」

目が光ったような気がした。…なんだか、またすごいタイプの人が現れたぞ…。俺が少々ビビってる間に病室に着いた。

“ガラ…”

「わーい！タイガーリリーだ！」

「コラ、その呼び方はやめなさい。レスラーみたいでしょうが！」

「わー、痛い～。ははは…」

鈴野さんが冴のこめかみをグリグリやって、冴は嬉しそうに痛がっている。

「なんで、タイガーリリーなの？」

「あのね、タイガーリリーは鬼百合の事なの。鬼のような演出家の友里って名前だから！略してタリー。」

「略すな！」

「そ、そんなに怖いんですか…？」

思わず敬語になる俺。

「やだなあ、村井君。優しいわよ？私。」

自分で言って、優しい人って居ないんじゃ…。

「ごめんね、メールだけで、なかなか来られなくて。っていうか、あんたが部活来れないせいで、忙しかったんだけどね。」

謝ってるのか、怒ってるのか、どっちなんだろう…。さすがオニユリ。

「それより、事件の事聞かせてよ。脚本のネタになるかも。新聞に書いてあったのって、長谷川君の事ばかりだったじゃん。他、どうなの？」

そうなのだ。新聞は見出しこそ『お手柄高校生三人麻薬売人逮捕』となっていたが、有名弁護士長谷川冬馬の息子にスポットがあてられ、あたかも事件はハセが解決したかの様になっていた上、俺は『長谷川風馬の同級生も居合わせた』としか書かれていなかったのだ。冴の応急処置の事は一切触れていなかった。別にいいんだけどさ…。でも、やっぱりちょっと悔しいので、ハセの家出の件^{くだり}から、冴が知らない手術前後のハセとのやり取りは除いて、事細かに説明した。

「へえ～。じゃあ、やっぱ新聞とはかなり違うわね。このコにもメールで聞いたんだけど…」

「ああ。こいつは説明が出来ないからな。」

ハセが相槌を打つ。

「そうなのよ。意味不明だったプーさんの出所がやっとわかったわ。」

「プーさんに、可哀想な事したかなあ。私が弾に当たっちゃったから、傷害罪も付いちゃったんだよねえ。」

「何言ってるの。可哀想なのはそこの二人でしょ。そもそも、冴が海行行って言い出したところから、おかしな事になるのは灯を見るより明らかなのに、よく二人とも付いて行ったわね。」

「結構キツイね。鈴野さん…。」

「そう？…ま、ボケにはツツコミが必要だから仕方ないのよ。」

外見のかわいらしさととは逆に、かなりクールな人らしい。

“ガラ…”

「冴ちゃーん。最後の検査の時間なんだけど…。」

看護婦さんがドアから覗いている。

「はい！今行きます！ねえ、タリー、戻って来るまでいる？」

「今日は帰るわ。脚本書くのと、部活で宿題まだできてないのよね。」

「そっかあ。」

冴が残念そうに言った。

「どの道、来週にはもう学校始まるし、冴明日退院でしょ？部活、来なさいよ。」

「そうだった！じゃあね、タリー。いってきまーす！」

“ガラ…パタパタ…”

入院患者とは思えない軽い足音が遠ざかっていく。

「あ、じゃあ俺下まで送るよ。」

「そう？悪いわね。」

と口では言いつつ、俺がドアを開けるのを待つ辺り、鬼つぷりが覗える。

「それで？村井君は、冴のどこが気に入ったわけ？」

「えっ…」

部屋を出るなり聞かれた。また目が光った気がする。

「なんていうか、遅いようで、危なっかしいところとか…」

「ふーん。ま、あんだけ好かれたら、君みたいな人は折れるしかないわよね。相手が美人なら特に。」

「俺、好かれてる…かな？」

ハセとのやりとりもあって、確かに俺は不安になっていたところだった。鈴野さんはそれを分かって、こんな事を言い出したのか？そうだとしたら、冴の本性を即効で暴いたのも頷ける。

「相当好かれてると思うよ、私は。冴に、どこが好きなのかとか、聞いた事無い？」

「…ない…。」

なんか怖くて、聞けなかった事だった。鈴野さんがふふんと鼻で含み笑いをして言った。

「聞いてみなよ。面白いから。」

「お、面白いって…。」

「それにね、なんでこんな話してるかっていうと、新学期始まったら、冴は多分相当モテる事になると思うのよ。」

「え、なんで、急にそんな…」

「村井君と付き合う事になって、あの変な眼鏡と三つ編みやめたわけでしょ。で、美人でしょ。そこで更に、新聞に躍り出ちゃったわけよ。しかも、あの記事だけ見てたら、冴が姫で長谷川君がナイト役。村井君は出てこない。長谷川君の場合、あの記事で有名弁護士の息子だってみんな知ったと思うし、実はかっこいいから、有利だけど、村井君が彼氏って聞いてもみんなピンと来ないと思うのよね。」

「そ、そんなに…？」

確かに俺は、特になんの特徴もない。それでいいと思って生きてきた。

「だからさ、冴に引っ張られてるのも楽しいかも知れないけど、そろそろ本当の自分を見つけてあげなよ。冴みたいに将来の夢とか、長谷川君みたいな得意分野とかさ。そうすれば、不安な事って少なくなると思うよ。」

「自分を見つける…。」

「そ！じゃ、わざわざ下までありがと！またね。」

行っちゃったよ…。鈴野さんは俺に地雷を埋めて帰ってしまった。良く分からないしこりを抱えたまま、仕方なく病室に戻ると冴が戻っていた。

「おかえり！遅かったね！」

「あ、うん、ちょっと話してて…。」

「タリー、変な事言い出さなかった？」

「え、いや…」

「変な事を言い出すのはお前だろう。」

「ひどいなあ、ふーたんは。違うよ。私みたいなんじゃないで…」

「ついに認めたか。」

「もう。聞いてよ〜。」

「早く言え。」

「だからね、タリーは、いい人なんだけど、優しさが逆で、いきなり人の核心に踏み込んじゃうの。うーんと、あ！そうだ。おせっかいさんなの。」

ドキッとした。さっきその洗礼を受けたばかりだ。

「だから、変な事言われなかった？って聞いたの。」

「いや、全然。…演劇部の事とか、聞いてた。」

「そっか。良かった。あーあ！やっと明日退院だ〜。」

「そうだな。全く、お前のせいで、とんだ夏休みだった。」

「まだちょっと残ってるじゃーん。ねえ、良君？」

「あ、ああ。うん。そうだね。」

「では、明日昼に迎えに来るからな。勝手に帰るんじゃないぞ。」

「はーい。じゃあねー！」

ハセと病院を出た。俺とハセの家は病院を境に反対方向だ。

「それじゃ、明日…」

「良二、お前、大丈夫か？」

「えっ…。なんだよ。急に。大丈夫だよ。あーあ、明日からやっとなつとの夏休みだ。」

「…そうか。ふん、俺は時々お前が羨ましい。じゃあ明日。」

ハセが背中を向けるのを見届けてから、俺も帰り道を歩き出した。

「大丈夫…か…」

全然大丈夫じゃなかった。羨ましいのはこっちの方だ。でも、なぜか言えなかった。誰にも言っちゃいけない気がした。

普通でいることが自分だった。本当の冴と出会って普通に基準はないと知った。付き合っ、誰かの特別でいることが大事になった。でも、その『誰か』という要素がない自分は何なんだろう。今は冴が俺を好いていてくれるから、成り立ってる。大体、どうして冴は俺なんか選んだんだ？それにも目を背けてきた。冴がいなくなったら？その後俺に何が残るんだろう。今、俺に残されたのは、確固たる自分は何か、という疑問の詰まった地雷だ。…そうだ。これはさっき埋められたんじゃない。埋まってる事に気付かないようにしていたんだ。踏まないように、触らないように、距離を置いてた。どうしたら、いいんだろう。地雷は爆破させなきゃ、撤去できない。それとも、今までのように、気付かないふりをしようか。…無理だ。一度、確信してしまったら、無くなるまでは、気になって怯えているしかない。そんなのは、嫌だ。

「ただいま…」

「あら、おかえり。ご飯できてるわよ。」

「うん。」

食卓はいつもと変わらない。両親が居て、弟が居て、猫が居る。

「冴ちゃん、やっとなつと明日退院ね。」

「うん…」

「やった！サエ、いつ遊びに来んの？」

猫のノラも、嬉しそうに一鳴きした。ノラは元野良の現在立派な家猫。高校受験の帰り道に、側溝にはまっているところを助けて連れ帰ったのが出会いだ。

「孝太は本当に冴ちゃんが好きだなあ。」

「だって、タンテイだよ。超かっこいいじゃん。おれもなりたい！」

「あら、孝太はこないだ宇宙飛行士って言ってなかった？」

「その前は、レーザーだったよなあ。」

「ぜんぶ！」

「そうか、そうか。頑張れ。」

笑い声が溢れた。俺も顔だけは笑っていた。俺も、子供の頃は成りたいものがあつたんだろうか。全然思い出せない。

「ごちそうさま。」

「あら、食欲無いの？夏バテかしらねえ。」

「いや、ちょっと…。宿題、やんなきゃいけないんだ。」

「そう。あ、じゃあ、これ飲みなさい。」

母さんが冷蔵庫から野菜ジュースを出して、俺に手渡した。

二階の自分の部屋に上がると、とりあえず、手付かずの問題集を鞆から出す。ページをめくった。確かこの辺りから…

「あれ！？」

…やって、ある。次のページも、またその次も…。他の問題集をめくっても同じ事だった。俺、やったっけ？…いや、やってない。でもこれ、俺の字…に、よく似てるけど、ちょっと違うぞ？

“カサ…”

課題の中から、メモが落ちた。何か書いてある。

『やっとなつと気付いた！驚いた！？毎日病院ありがとう。冴』

単語を繋げただけの、勢いのみの文章。思わず一人笑いした。ありがとうはこっちだよ。あの二回の脱走はこのためだったのか。冴らしい。

「あーあ。やる事なくなっちゃったなあ…」

…冴らしい、か。俺らしいって何だろう。ハセにもらしさがある。俺もハセみたいに頭が良かったらどうだったろうか。冴みたいに成りたいものがあつたらどうだったろうか。俺って、居る意味、あるんだろうか。そう思って、はっとした。俺はすでに地雷を踏んでしまっている。ため息をついて、部屋の真ん中に寝転がった。

「良二ー！」

下から俺を呼ぶ、母さんの声で目覚めた。悶々と、病院からの帰り道で考えていたような事を繰り返し考えているうちに、いつのまにか眠ってしまっていたようだ。

「風呂はもうちょっとしてから…」

“ガチャ…”

「長谷川さんから電話！」

「え？ハセが？」

なんで携帯に掛けないんだろう。

「違うのよ！お父さんの方。風馬クン帰ってないんですって。」

どういう意味だ？母さんの顔が、ただ事でない事を告げていた。急いで階段を降り、電話に出た。

「代わりました！良二です。おじさん、何かあったんですか？」

“それが、帰って来ないし、携帯にも出なくて…。そっちには行ってないかと思って電話したんだ。”

「来てないです。ハセとは五時過ぎに病院で別れました。」

時計を見ると、十時をまわっていた。

「あ、冴のところは？」

“連絡したが、君と一緒に出たのを最後に、見ていないらしい。事務所のほうも、今は誰も居ないはずだが一応見に行った。が、居なかった。もしも、また家出なら、君のところかと思ったんだ。”

「前は別として、家出はありえませんよ。あいつらしくない。」

“そうなんだ。連絡が付かないなんて、それこそらしくないんだよ。”

ハセは同じ間違いを繰り返す馬鹿じゃない。第一、あいつが家出するほどの問題は、あの事件で解決…。おい、あの事件は、麻薬がらみ、新聞に大きく載った…

「おじさん、まさか、誘拐…」

“ああ…。この間の事件で、たしかにある筋から脅しをかけられてはいた…”

「俺、とにかくそっち行きます！」

“いや…。うん、頼む。じゃあ後で。プツツツツ…”

受話器を置く。

「母さん！俺ちょっと行ってくるわ！」

ハセの家に急いだ。

「ごめんなさいね。さ、上がって。」

インターホンを押すと、すぐに玄関が開いて、ハセのお母さんが居間へと案内してくれた。庭に面した長い廊下を付いて歩く。豪華な錦鯉のいる池が、一瞬変な色に光った。どこかで猫が鳴いていた。ハセのお母さんは、おばさんと呼ぶのをためらうような、日本人形のような美人だ。ハセは母親に似ている。息子が心配なせいか、彼女はいつもより顔色が悪い。

「あなた、良二君。」

「ああ。すまないね。こんな時間に。」

「ご苦労。良君。」

「いえ…って、え！？冴！？」

おじさんの後ろから、冴がびよこんと出てきた。

「じゃーん！事情を話して釈放してもらったー！」

「釈放じゃなくて、退院だろ！全くもう…。」

「良二君に電話した後、すぐ来てくれたんだよ。」

冴にも連絡したと聞いた時点で、気付くべきだった。こうなって、俺が出来るのは一つ。

「冴…。無茶はするなよ。」

忠告だけだ。

「分かってるよー。」

冴の『分かっている』は俺の尺度とは違う。もしもの時は、俺が意地でも止めるしかない。

「はあ…。おじさん、警察には？」

「一応、巡回中に気を付けてもらう程度に話しておいた。まだ五時間ちょっとしか経過していないし、事件性のある何かがあった

わけじゃないからな。さっきも風馬の携帯にかけたが、やはり出なかった。」

確かに、今時高校生が五時間程度連絡が付かないからって、大騒ぎするのもおかしい話だ。でも、あのハセが、自ら騒ぎを起こすような事をするだろうか。冴ならともかく…

「冴？何か隠したり、企んでたりしないよな？」

「してないよ！今回は！今回はほんとにノータッチ。だから、勤もあんまり冴えなくて、なんかとりあえず、ふーたん家って思ったから、来たんだよ…。」

腕を組んで考えている。どうやら本当にお手上げらしい。

「おじさん、俺達、病院からここまでの道、探してきます。」

「そうか？すまないね。では私達は風馬が帰ってきた時の為に、ここで待機しているよ。」

「はい。行って来ます。ほら、行くぞ、冴。」

「はい。後でね。ふーたん父、母！」

「ええ。気をつけてね。」

今一緊張感に欠ける冴を引張って、外に出た。

「冴がここ来るとき、病院からここまでの道で、なんか変わった事は？」

「うーん。そう思って、気を付けてはいたんだけど、何にも無かった。ちゃんと、寄り道しないで最短距離で来たんだけど…。」

「そうか…。」

合理性を重視するハセが、寄り道するとは考えにくいし…。冴が最短距離で来て何も無かった…ん？冴の言う最短距離って、

「最短距離って、道のりだよな？」

「んーん。直線距離。三、四軒、庭通った！道も通っちゃったけど。」

「バカ！ハセがそんなとこ通るわけないだろ！」

「だって～、力が余っちゃってさあ。じゃあ、道のりの最短距離、しゅっぱ一つ！」

元気よく歩き出す。

「おいおい、そんなに早く歩いたら、探すものも探せないだろ。」

「だって、ふーたんの帰るときの速度ってこんくらいじゃない？これで目に付くのが手掛かりになるかと思って。」

「それは…」

…そうかもしれない。確かに、ハセはどこにいても、帰るのは早い。

「でも、もし、何か他の要素が加わってたら、その速さじゃ分からない事もあるんじゃないか？」

「…うーん。そっか。よし。じゃあ、良君に合わせる。」

再び歩き出したが、何をどう探したらいいのやら…。色んな張り紙や何かはあるが、それに気を取られるようなやつじゃないし。他にどこか行ったのか？と言っても、出不精のハセがわざわざ足を向ける場所なんて、俺ン家か、冴のいた病院くらいだ。やっぱりこの道のどこかで、何かあったとしか思えない。

「なあ、冴。やっぱり、事故か何かあったんじゃないかな。」

「うーん。派手な事故なら、連絡あると思うし、誘拐でもやっぱり連絡あると思うんだよねえ。」

「そう、だよなあ。」

「殺しが目的の誘拐なら別だけど。」

「ええ！？」

尋常じゃない恐ろしい事を、普通に言う。

「でもさあ、それもなんだかしっくり来ないよね。だって、いくら細くて弱そうだからって、180センチもある高校男子を捕まえて、殺そうなんて思わないよ。」

「じゃあ、この間の事件、新聞じゃハセが解決したみたいになってたから、麻薬組織の犯行って考えたら…」

「それでも、なんか変なんだよ。あのプーさんは売人って言っても、ただのぼしりだったわけじゃん。それで押取されちゃった分の麻薬は、確かに痛手だっただろうけど、組織からしてみればそんなに価値があったとは思えない。なのにまた自分たちに捜査がまわるような事しないでしょ。」

「…しないよなあ。」

「大体、死んでたら、流石に私もなんかピンと来ると思うんだよね。」

確かに、切羽詰ったときの勘は冴えるから、余裕の表情なのは、ハセが無事ということのような気もする。

「良君はなんか見つけた？」

「いや、全然。」

民家の隙間から、深めのドブ川まで注意深く覗き、声をかける。冴は冴の感性で、マンホールとか側溝に首を突っ込んで、名前を呼び続けている。続ける事十分ちょっとで、病院に着いてしまった。

「ふう。着いちゃった…。」

「そうだなあ。どうしようか。って、一度また、ハセの家戻ってみるしかないか。」
もし居なくなったのが俺だったら、こんなに探してくれるだろうか？またあの不安が俺を支配する。

「そうだね。もしかしたら、もう帰ってるかもしれないし。」
さっき来た道をまた引き返す。

「あ！最後に別れる時、何か喋ったりしなかった？」
「少しだけ。大丈夫か？って聞かれて、大丈夫って、やっと明日から冴との夏休みだって言って、そしたらあいつ、時々お前が羨ましいって言ってたよ。いつもの厭味だよ。俺はハセと違って、目の前の事にしか気が行かないからさ。」

「ふーん…」
「第一、考え事してたのは俺の方だったし、ハセは何とも思ってなかったと思うよ。」
「そっかあ。ねえ、何考え事してたの？」

「えっと…」
「言いたくないなら、無理しなくていいよ。」
気遣いによるこの切り返しの早い言葉も、今の俺には、冴が離れていく不安に変わる。

「さ、冴、聞きたい事が、あって…」
「うん！なんでもどうぞ！」
「こんな時に聞くことじゃないって、分かってるんだけど…」
「いーよーいーよ。身近な解決が、大きな解決に繋がる事もあるし！聞きたい！」

何の裏もない笑顔。俺はこの顔が、命をかけられるほど好きだ。
「冴は…俺の、どこが好きなの？」
ついに聞いてしまった。冴が一瞬きよんとした。そりゃそうだよな…

「ごめん、今の忘れて…」

「今好きなトコ？それとも最初に好きになったところ？」

「じゃ、じゃあとりあえず、今の方から…」

「白いご飯だから。」

「はい？」

「私、カレーなの。それだけじゃ濃すぎて食べられない。でもご飯と一緒に食べられるでしょ？」

「う、うん。」

「それにカレーは他の材料の事を考えないで、全部自分の味にしちゃうの。でもご飯はそのままでも食べられるし、他の材料に迷惑かけずにご飯だって主張できるの。だから好き。」

分からないような、分かるような…。

「そのままで美味しいものって、そんなに無いんだよ。」

そう言われると、確かにそうだ。

「じゃ、最初は…？」

「ノラ。」

「ノラって家の猫の、あのノラ？」

「そう、そのノラ。あの受験の日、私同じ所にいたの。鳴き声は聞いてたんだけど、どこにいるのか分からなかった。高校に受かるのは分かったのに、ノラの居場所は分からなかった。木に登って探してたとき、その下で、良君が見つめて持ってた。猫探すのに、普通は下から探すんだって、後で気付いたの。猫は木に登るけど、普段と違う事になったから、困ってた。それを見つけた良君は、私にとってはすごい人になったの。」

「そんなに前から…」

「うん。だからそれから私、良君のストーカー！」

聞こえが悪いが、正にその通りだ。でもそのお陰で、俺は人生最高かもしれないものを手に入れたんだ。

「ご飯はご飯があるだけで、いいんだよ。ご飯が嫌いな人って聞いた事無いもん。カレーとは特に相性いいしね！」

「うわ！」

冴が横から抱きついてきた。…というより、タックルに近かったが…。

「そうだ。宿題、ありがとな。」

「あ！驚いてくれた？」

「うん。」

冴がまた、屈託なく笑う。なんだか気が楽になった。『ご飯はご飯があるだけでいい』というのは、俺は俺が居るだけで良いという事だ。

「…ってというか、もう着いちゃったねえ。」

冴が困った顔で言う。話しながら歩いているうちに、長谷川家の門まで来てしまった。やっぱり、何もなかったか。…そういえば、ノラで思い出したけど…

「良君、何きよろきよろしてるの？」

「いや、さっきハセんとこ来たときから、ずっと猫の鳴き声がしてて…」

「…ほんとだ。なんか、子猫っぽい声だね。どこかな？」

「近いところから聞えてるんだけど…」

母親でも呼んでるような鳴き声。その声を頼りに、長谷川家の塀沿いを歩いた。

「この辺から聞える。」

立ち止まって、側溝や、壁の隙間が無いか探したが何も無い。

「良君！あれ！」

冴が上の方を指差していた。見上げると、塀の向こうに生えている木の枝に、子猫がしがみ付いている。塀の高さは2メートルくらいだ。これくらいなら何とかなるかも…。ジャンプして、塀の角に掴まる。後は、懸垂で上に…。壁に足を引っ掛けようとしたが、滑る。よし、もう一回…

「何してるの？」

冴が、塀の上でしゃがんでいる。

「うわ！」

“ズザッ…”

驚いて塀から手を離し、落ちる途中で壁で鼻先を擦った。いてて…。冴はそんな俺を塀の上から不思議そうに見ている。

「良君、上らないの？」

上らないんじゃないなくて、上れないんだよ…。きっと冴にとっては、上れない人間がいる事自体が不思議なんだろうな。

「いや…。ど、どうやって上ったの？」

「えっと、ぴょんってこうやって、ひょこって…。もう一回やろうか!？」

楽しそうに下りようとする。

「いや! いい! いいよ! 下りなくて! それより、猫は? 届きそうか？」

「あ! そうだった。」

と言って、急に立ち上がる。落ちたらどうすんだよ! ? 思わず受け止められるように身構えた。が、良く考えたら、塀の上にあつという間に上れる人間が、そう簡単に落ちる訳ないよな。

「もう大丈夫だよ。ほら、おいで。」

子猫は一瞬ビクッとなったが、冴の両手の匂いを嗅ぐと、冴の方へ顔を近付けた。恐る恐る片足を出す。枝が揺れて、子猫が滑った。

“ガサッ…”

「おっと!」

落ちる前に、冴がキャッチした。

「危なかったねえ。よしよし。」

子猫は母親に甘えるように、冴の首に自分の首をぴったりくっ付けた。そのまま塀の上で冴は子猫に話しかけたり、撫でたりしている。

「冴! 早く下りろ。危ないから。それに、ハセ探さないと。」

「うん。…ん? …んあああ!」

塀の上でしゃがんだ冴がおかしな声を上げた。

「なんだ! ? どうした! ?」

「いた!」

「傷が痛いのか? 早く下りて…」

「違う! いたの! ふーたん!」

「は?」

「ここ! 下に、ふーたんが落ちてる!」

庭側の塀の下を指差して、冴が叫んだ。

「あ、もしもし、母さん？…うん、ハセ見つかったよ。…で、今日泊まってけて。…うん、じゃ、おやすみ。」

一時間後、ハセは今、長谷川家の豪華なソファの上で頭を冷やし、冴は子猫とじゃれあっている。冴が見つけた後、ハセの両親に事情を話して、庭の隅に倒れていたハセを家に運んだ。暫くするとすぐに目が覚めたが、心配した両親に引き摺られて病院へ。ハセは病院で検査を受け、なんともないことが分かると、俺達と共にすぐに帰宅した。ハセの携帯は、錦鯉の住処に落ちていた。俺が最初にここに来た時見た、池の変な光は携帯のイルミネーションだったのだ。『なんかとりあえず、ふーたん家』と思った冴の勘も、正しかった。今思えばすぐ側にいた事を示す事だらけだ。

「ところでハセ、なんであんな所で気絶してたんだよ？」

「うむ…。」

目を瞑ったまま黙り込んでいる。

「なんだよ。みんなお前の事、心配してたんだぞ？」

「…。」

やっと目を開けたかと思えば、チラッと冴を見る。でも、もう俺は不安にはならないぞ。なんたって、おれは白米で冴はカレーだからな。ハセは強いて言うなら、らっきょうか福神漬け。うーん、白米か…。らっきょうか福神漬けの方が、インパクト強いな…。しかも、カレーライスとは切っても切れない縁じゃないか。やっぱり、これはちょっと心配…。だけど、ノラの一件からの話で冴が俺を好きなのは分かっているんだし…

「…猫だ。」

「えっ？ノラが何！？」

「違う。あっちの猫だ。」

冴とじゃれ付いている子猫を顎で指した。

「ああ、あの子猫が、どうしたんだ？」

「質問に答えたんだ。」

え？俺何聞いてたんだっけ…。

「だから、あの猫を取ろうとして、落ちた。」

「ああ、なんだ。そうだったの…って、ええ！？ハセ、助けようとしたのか？」

「…そうだ。」

信じられない。肉体労働が大嫌いで、何よりもまず自分の保身を優先するハセが、子猫を助けようとして落ちた、だ！？

「何だ。その顔は。」

「い、いや、だって。ホントに助けようとしたのか？」

「悪いか。」

「全然。全然悪くない。けど、なんで？お前、そんなに猫好きだったっけ？」

「特に好きでもない。」

「じゃ、なんで…？」

また、チラッと冴を見た。冴はこっちには目もくれず、真剣に子猫と遊んでいる。

「お前は、ノラを助けたらろう？」

「そうだけど…。」

「だから、俺も助けたら…いいと思ったんだ。」

「それって、俺の真似し…」

喋る途中で、睨まれているのに気が付いた。ハセはたしか、別れ際に『お前が羨ましい』と言っていた。それはこっちの台詞だ、と思っていたが、ハセはハセなりに考えて、俺の真似事をしたってことか？そうか。ハセはノラの一件を知っているのか。冴が最初、俺に好かれるために『普通』を演じてた事と似ている。ハセは冴に好かれている俺を真似ようとしたのか。それは失敗に終わったけど、これって俺がこの鼻持ちならない秀才の親友に、認められてるところがあると言う事だ。それぞれがそれぞれに、憧れながら繋がっているんだ。傍から見れば微妙な関係かも知れないけど、俺から見ればいいチームな気がする。

「俺は、ハセが羨ましかった。冴も。」

「そうか。だが、結局俺が導き出した答えは…」

「役代わりするには、無理がつきもの。だろ？」

「なんだ。良く分かったな。」

「俺さ、鈴野さんに『本当の自分を見つけてあげろ』って言われて、俺らしいって何だって悩んで、分かった。」

ハセが起き上がって、俺に向き合った。冴もソファの横から覗いている。

「それは考える事でも、自分が決める事でもないんだって。らしさって、結局自分をよく知った人が、勝手に後から付ける理由なんだよな。」

冴が頷きながら言った。

「だね。世の中に名前があるのは、もうそこにいる時点で、それが全てを表してるからなんだよ。きっと。」

「名は体を現す。その通りかもしれんな。…というか、やはり、鈴野友里に何か吹き込まれていたんだな。良二。」

「そうだよ～。何でもないとか言っというて。」

冴が膨れっ面でソファにドサッと座る。

「俺も、奴にはやられたからな。」

ハセが苦々しそうにつぶやいた。

「マジで!？」

「はいはい！実は、私も言われたー！」

冴が元気余り気味に答えた。

「なんて言われたんだ？」

「俺は、『馬鹿を馬鹿だと思って油断していると足元を掬われる。たまには馬鹿をやってみてはどうか』と。」

馬鹿な行動…

「…ん？まさか、それでこないだ家出なんて…」

「あの言葉が、引っ掛かっていなかった、とは言えん。」

「じゃ、冴は…？」

「『本当の自分じゃなきゃ、居る意味ない』。」

「何？…だから、良二の事で急に本性を明かすだのと言い出したのか？」

ハセが何ということだ、と言う感じで眉間に手を当てた。

「うん！」

鈴野友里…恐るべし…。

「まー、でも、最終的には上手く行ってるからさあ。」

「うーん。そう言われると、そうなんだよなあ。出鱈目じゃないし。」

「しかし、何かやられっぱなしで、腑に落ちないのは、俺だけか？」

みんな黙って、お互いを見やった。それぞれが、自分らしく考えた末に出てきた事は…

「やりますか。」

俺は柄にもなくにやりとした。ハセもつられてにやりとする。

「お前らしくはないが、俺は大賛成だ。」

俺らしくない？いいじゃないか。俺には俺らしさが何か知ってる仲間が居るってことだ。

「何？何するの!？」

冴には意味が分からないらしい。

「お前は分からなくていい。」

ハセが子猫を抱き上げ、俺に同意を求める視線を寄こした。

「そうだな。分かんない方がいいかもな。」

「何で～。」

冴が膨れている。俺はハセから子猫を取って、冴に渡した。

「このコに名前を考えてあげるのが、冴のミッション。」

ミッションという言葉にぴくっと反応する。

「了解！」

冴は早速子猫と見つめ合いながら、名前を考えている。その方が冴らしい。俺とハセが考えるのは、鈴野友里仕返し作戦。冴が寝入った後、夜明けまで作戦会議が続いたのは、言うまでもない。